



〈2002年第2回JMMA特別事業〉

目 次

【論考・提言・実践報告】

ダーウィンセンターと入館無料化～大英自然史博物館からの発信
埋蔵文化財の活用と学校教育
博物館の存在意義を求める 利用者誘致とボランティア養成ー「ボランティア体験講座」の一側面

大英自然史博物館 シャーロン・アーメント ……2
宇都宮大学大学院 小松 弘子 ……4
（助）北海道開拓の村 中島 宏一 ……7

【時の話題】

博物館とミッション『さがそう！間違い？科学館』での試み

（株）乃村工藝社 広沢公太郎 ……10

【特別事業開催報告】

2002年 第2回JMMA特別事業の実施報告
アイリーン教授の講演

JMMA理事・特別事業実行副委員長 高安 礼士 ……13
JMMA理事・特別事業実行委員 高橋 信裕 ……17

【研究部会報告】

ミュージアムショップ研究部会
制度問題研究部会

研究部会幹事 松永 久 ……22
研究部会幹事 井上 敏 ……24

【新刊紹介】

『生涯学習の新しいステージを拓く（第3巻） クリエイティブな学習空間をつくる』

宇都宮大学大学院 小松 弘子 ……26

【インフォメーション】 ……27

論考・提言・実践報告

ダーウィンセンターと入館無料化 ～大英自然史博物館からの発信

大英自然史博物館 コミュニケーション&ディベロップメント部長
シャローン・アーメント

ロンドンのサウスケンジントン地区に位置する大英自然史博物館（The Natural History Museum-NHM）は、自然史分野では世界3大博物館の一つとして知られています。それは、長く変化に富んだ歴史と、貴重且つ多種多様な所蔵品、数多くの研究成果、それらに基づく展示手法と、それを通じての社会貢献などが多くの評価を受けているからです。

大英自然史博物館概要

開館	1881年
常勤職員	800名
研究者	320名
標本	7000万点
研究部門	植物学、動物学、昆虫学、古生物学、鉱物学
場所	大英自然史博物館 ロンドン サウスケンジントン地区 ウォルター・ロスチャイルド博物館 イギリス トウリング バイオディバーシティ・リサーチ・ワールド・ステーション (生物多様性研究局) ベリーズ 中央アメリカ
ギャラリー/展示エリア	22,000㎡ (特別展用エリア 500㎡含む)
来館者	300万人/年

大英自然史博物館は、内外問わずさまざまな要因により改革を重ねてきました。近年においては、目に見える形での更なる改革、刷新が求められています。

社会の変化、文化、科学界、自然界に対する姿勢の変化、政府政策の変化、市場の変化により、博物館は常に来館者の体験を重視した革新的な新展示の展開を迫られています。これに伴い、博物館で働く私達一人一人が、その考えや行動を変えてきています。

数多くの事例を持つ大英自然史博物館の革新例の中でも最も顕著なものが、“ダーウィンセンター第1期オープン”と“博物館入館無料化”です。



ダーウィン・センターの科学者

館外からの要望に応えるために

館外からの意見は、大英自然史博物館の活動や役割を形成するうえで、大きな役割を果たしています。この原理は、ビジネスや商取引の分野ではごく当たり前のことですが、博物館という組織には一般的にあまり受け入れられていません。博物館という世界では、来館者のニーズや要望に応えることなく、常に内向きであろうとする傾向があります。しかし、これは大英自然史博物館にはあてはまりません。

近年、私達が開発・展開してきた各種のエキサイティングな展示は、非常に多くの人々に支持され、高く評価されてきました。私達は、世界でも有数の高い市場競争がくりひろげられるロンドンという都市にあって、私達の展示会は、ロンドンを訪れる1100万人の旅行者、また900万人のロンドン近郊在住者、さらに6000万人のイギリス国民にとっても、『一見の価値がある』展示でなくてはならないという必要性を強く感じています。

大英自然史博物館では、常設展示と特別展示を上手に組み合わせ、人々の関心をひき来館者の増加を図っています。近年開催の主な特別展示としては、1999年『発見の航海 (Voyages of Discovery)』、2000年『リズム・オブ・ライフ～生命の躍動 (Rhythms of Life)』、2001年『プレデター (Predators)』、『フェルディナンド・バウアーの芸術 (The Art of Ferdinand Bauer)』、2002年『マギリヴレイ (McGillivray)』、『ダイノバード (DinoBirds)』、『荒れ狂う地形 (Turbulent Landscapes)』等があります。加えて、『BG Wildlife Photographer of the Year』という写真展も毎年開催しています。

特別展示プログラムは、『プレデター』や『ダイノバード』のように主に家族向けを対象とした“ベストセラー”展示と、『マギリヴレイ』や『BG Wildlife Photographer of the Year』等、より大人向けに知的要求レベルの高い展示会とを組み合わせで展開しています。各展示会についての詳細は、大英自然史博物館のホームページをご覧ください。

<http://www.nhm.ac.uk/>

常設展示には、2001年に『臭～いティラノ (The



ニール・チャルマン館長、ダーウィン・センターにて

Smelly T.rex)』、2002年9月30日オープンの『ダーウィン・センター (The Darwin Centre)』の2展示が加わり、質量ともに更に充実しました。また、2002年には、展示としては初の試みである『空から見た地球 (Earth from the Air)』もオープンしました。

長年にわたる日本の展示制作会社ココロ (<http://www.kokoro-dreams.co.jp>) との協力関係は、大英自然史博物館の活躍に大きく寄与しています。動刻恐竜ティラノサウルスは『プレデターイヤー (The Year of the Predator)』の一つとして活躍、また『プレデター (Predators)』展では巨大タランチュラ、カメレオン、ホオジロサメなどが、多くの観客を魅了し、多大な集客力を発揮しました。

人気のティラノサウルスは、エントランスホールで入館者を出迎えるその姿を一目みようとして、2週間で400,000人を超える人々が訪れ、博物館前のガーデンにまで行列を作るという開館以来類を見ない人気を發揮し、プレデター展は、現在ヨーロッパを巡回中です。

こうした成功の秘訣は、来館者にとって意義深い

ものを用いることで、博物館と来館者を結び付けてきたことにあります。それは来館者に、真実、真の科学、真の標本、真の体験を提供することでした。そしてこれらの組み合わせが、ダーウィンセンター第1期オープンへと結びついたのでした。

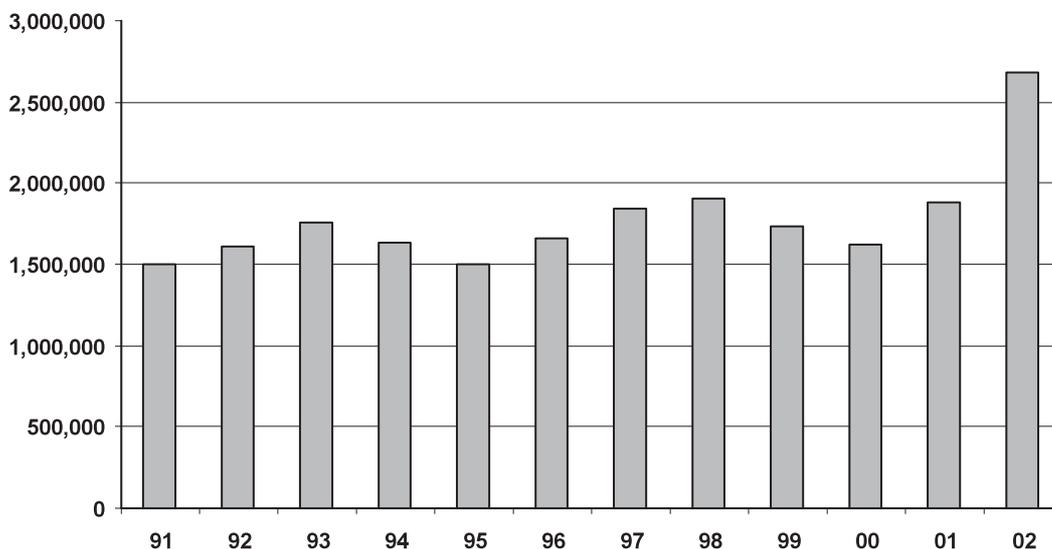
ダーウィンセンターでは、通常は目にするのではない博物館内部の研究作業を見学できる等、ユニークな体験をすることができます。新たに建設した建物の内部には、展示エリア、コレクション所蔵エリア、研究施設および研究成果の発表エリアがもうけられています。工業用アルコールに保存された2200万点の動物標本が展示されており、50名の研究者と展示を紹介するガイドがいます。30分毎に出発するガイドツアーでは、参加者は特製の白衣をきてキャプテン・クックやチャールズ・ダーウィンが収集したコレクション展示を見学することができます。また、毎日1日2回、“ダーウィンライブ”と呼ばれる研究者たちによる特別なプレゼンテーションを催しており、参加者は展示エリアに備え付けのコンピュータ（日本語を含む全12ヶ国語に対応）を通して、コレクションについて質問をすることができます。ダーウィンセンターは、2002年9月にエリザベス女王によってオープンされて以来、大英自然史博物館の総入場者数の16%に当たる60,000人が訪れています。

入場料の無料化

大英自然史博物館は、イギリスの行政環境の中で運営されています。公的資金による運営という性質上、政府の政策によってその運営が左右されます。2001年12月、国立博物館の入場料に関する政策変更により、国立博物館の入場料は引き下げられ、現在では完全無料となりました。

入場料無料化により、大英自然史博物館にも変化

Annual Visitors to end of October 2002



の波が押し寄せました。入館者数は70%以上増加しており、2002年度の入館者数は300万人に達すると見込まれています。

2001年12月まで、大英自然史博物館では入館料を徴収してきました。入館料収入は博物館の総収入に対して大きな割合を占めており、特別展プログラムの制作や第1期工事で3000万ポンドを投資したダーウィンセンターなどの建設に役立てられてきました。

2001年12月まで入館料を一律徴収していたため、特別展などは追加料金不要で見学することができましたが、料金体系の変更にともない、現在では特別展を有料としています。

これらは、博物館の収益構成に対して革新的なことです。博物館は、より多くの入館者を集めることで、収益を上げ、そこからより規模の大きな、質の高い展示会の制作に投資していく必要があります。そのために、特別展だけではなく、手荷物一時預かりやガイドツアーなどの有料化も始まっています。また、寄付金も積極的に募っています。

入館無料化によって、入館者の比率や行動にも変化が表れています。海外からの来館者が31%から51%へ増加した反面、全体的に博物館で過ごす時間は短くなり、施設内で使うお金は少なくなっています。館内での飲食施設に対する要望も変化し、成人の入館者が増加しました。こうした変化は、大英自然史博物館が今後もより適切な提案を続けていかなければならないことを意味しています。大英自然史博物館では、今後20年間の、博物館の全ギャラリーでの展示計画、ミュージアムショップでの取扱商品や飲食施設などについて、来館者向けの営業戦略の大枠を構築し始めています。

こうした営業戦略の成果は、来館者の声に耳を傾け、いかに速やかにそのニーズに応じていくかによって大きく左右されます。ダーウィンセンターの成功および入館無料化によって得られるさまざまな経験をもとに、私達は更なる改革を迫られており、これに勇気をもって対応していきます。

(翻訳：三田武志・株式会社ココロ)

埋蔵文化財の活用と学校教育

宇都宮大学大学院教育学研究科
小松 弘子

1. はじめに

学校週5日制や総合的な学習の時間の新設に代表される新学習指導要領の完全実施に伴い、学校教育を取り巻く環境は大きく変化しつつある。学校教育が地域との関係をより一層深めながら展開していくことになる。

小稿では、2つの県立埋蔵文化財センターが埋蔵文化財の活用方策として取り組む、学校との連携に関する実践を紹介する。特に職員を学校に派遣して授業を行う「出前授業」と教員を対象とした「研修」の在り方について比較検討し、埋蔵文化財センターと学校の連携の課題を探っていききたい。

2. 群馬県埋蔵文化財調査事業団

(1) 施設の概要

1978年に設立された群馬県埋蔵文化財調査事業団は、埋蔵文化財の調査と研究を通して、人々に文化財の大切さを広め、次世代に伝えていくことを目的としている。また学校教育と連携し、文化財保護思想の普及・啓発に寄与する活動も行っている。

1996年には、最新の発掘情報を発信するセンターとして「発掘情報館」がオープンした。「発掘情報館」には、遺跡情報室、体験学習室、資料展示室、学習相談室、研修室、図書室があり、各部屋には至る所に机と椅子が設置されており、利用者が効率的に学習できる環境が整備されている。

埋蔵文化財や地域の歴史を調べたり、文化財の積極的な活用を促すために、人々に開放された学習空間である。



(2) 主な教育普及事業

事業団では、収蔵される埋蔵文化財を活用した教

育普及活動が展開されている。学校や他の社会教育施設への出前授業の他、収蔵資料の巡回展、収蔵資料の貸し出し、児童生徒向けワークシート「歴史たんけんノート」の発行、発掘現場での現地説明会、発掘体験、中学生等の職場体験の受け入れや教員向けの研修事業が実施されている。特に教員研修については、教材開発を主とした「地域教材開発研究・研修報告書」が刊行されるなど組織的に行われている。

(3) 「出前授業」

主として小、中学校からの依頼に応じて職員を派遣する「出前授業」を行っている。職員は、教員との事前打ち合わせの時間を十分に取って、学習の目的や方法、学校側の要望を理解した上で、授業に臨んでいる。しかし、単に「体験させたい」というだけで、学校側の目的やねらいが不明確な場合があり、的確な情報提供ができない場合もあるという。事業団職員は、これを「意識のズレ」ではなく、「接点の違い」と表現している。同じ用語であっても職業が異なれば、イメージや語感、意味合いが異なることはしばしばみられるが、学校との連携に際して特にこの問題は大きく影響すると思われる。

出前授業では、職員は主に教員とのチーム・ティーチング形式で授業が展開される。事業団では特に体験を通して、自ら学ぶ「きっかけ」を与えることが大切だと考えており、実物資料を用いて、直接触れることを重視した活動を展開している。

これまでの出前授業の実践例として、火おこし体験、土器・石器・はにわ・勾玉作り、粉ひき、アンギン編み、野焼きなどが一般的に行われている。これまでは、技術的な指導を中心として授業を進めてきたが、今後は、実物資料が持つ情報をどのように引き出し、児童生徒が理解できる言葉で伝えていくかを重要視していきたいので、そのための職員の資質向上が課題であるという。

(4) 「教員向け研修」

事業団では、教員に対する研修は体系的に進められている。「出前授業」「資料貸し出し」を受ける前に行われる主として埋蔵文化財の取り扱い方を学ぶ「事前講座」、発掘などを体験する「埋蔵文化財専門講座」や、教員が年間に数回事業団に通い、職員とともに埋蔵文化財を活用した教材開発を行う「地域教材開発研究」の事業などが実施されている。「発掘情報館」に蓄積されている埋蔵文化財や情報を、事業団職員だけではなく、教員自身が取り扱えるようにするために、事業団では職員の「出前」から教員の「自前へ」という転換をめざし、連携の理想型と位置づけている。



3. 栃木県埋蔵文化財センター

(1) 概要

1991年に設置された栃木県埋蔵文化財センターは、発掘調査の結果を多くの人々に伝え、埋蔵文化財の保護や、調査・研究を行っている。また、人々の教育、学術、文化の発展に貢献し、地域の文化財や歴史遺産についての理解を深めるために、その環境作りの一端を担っている。

(2) 主な教育普及事業

埋蔵文化財センターでは、学校に対する出前授業の他、資料の貸し出し、発掘現場での現地説明会、発掘体験、中学生の職場体験の受け入れ、教員向け研修と群馬県とほぼ同様の事業を展開している。特に学校教育をサポートするための「どき土器体験10」というプログラムが用意されている。1. 遺物貸出 kit、2. 火起こしセット、3. 石器作りセット、4. 簡易勾玉作りセット、5. アンギン・セット、6. 縄文研究補助教材、7. 体験学習復元土器（縄文料理体験用）、8. 土器パズル、9. 原始・古代復元衣装、10. 講師派遣

(3) 「出前授業」

埋蔵文化財センターでは、総合的な学習の時間での「出前授業」の依頼が増えている。職員が授業の目的を把握するために、教員と事前打ち合わせを必ず行うが、この時点では目的やねらいだけを明確にし、詳細な指導案は作成していない。センター職員の授業は、児童生徒との質疑応答や対話の中から、興味、関心をベースとして、授業の目的に即して進められている。こうした展開は「自ら学び、自ら考え、主体的に判断する」ことをねらいとする総合的な学習の時間の理念に基づくものと思われる。また、群馬県のようなチーム・ティーチングによる授業ではなく、教員も生徒と一緒に学び、体験してもらうことにしているという。

(1) 「教員向け研修」

2001年度から教員を対象とした、「埋蔵文化財活用のための基礎講座」を実施している。講座では、教員自身が埋蔵文化財や地域理解を深めることを目

的とし、埋蔵文化財などの実物資料を教材として活用できる知識や技術の習得が図られている。そのため、考古資料の扱い方や石器作りなどの体験活動を行うなどの工夫がなされている。

4. まとめ

2001年度から導入された「総合的な学習の時間」は、知識を教え込む学習ではなく、学び方や調べ方（方法知）を身につけることをねらいとしており、体験的な学習や問題解決的な学習による展開が期待されている。

埋蔵文化財は、古代に生きた人々の暮らし方、生活様式そのものを伝える総合的な地域素材である。多様な考古資料は、人間の暮らしの知恵など様々な素材が閉じこめられた情報のカプセルでもある。埋蔵文化財センターには、時期は限定されるが衣食住をはじめとする地域の暮らしや自然、文化といった様々な素材が系統的に整理されている。同時に両施設にみられるような多様な体験活動プログラムが教材とともに用意されていることを考えると、総合的な学習の時間は、埋蔵文化財の活用の可能性をより広げる契機となるものと思われる。

さて、小稿でとりあげた2つ施設の教育普及事業「出前授業」と教員対象の「研修事業」の比較検討から概ね次のようなことがわかった。

- (1) 教育普及事業の内容がある程度固定化していること。ここで取り上げたのは2つの施設であるが、文化財センターの教育普及事業は、職員の派遣による出前授業、収蔵資料の貸し出し、発掘調査の現地説明会、収蔵資料の巡回展示、体験学習プログラムの提供、教員対象の研修会、展示施設を持つ場合はワークシートなどである。これらは、ほぼすべて博物館における教育普及活動と同様のものであり、埋蔵文化財センターとしての顕著な特性はみられない。このことは、学校との連携においても同様である。
- (2) 教員の自立的な活動を可能とする支援（研修）が行われていること。学校との関係でみると、群馬県の地域教材開発研究や栃木県の教員研修などに見られるように、教員自らが自立的に埋蔵文化財に関する知識や技術を身につけることによって、センター職員の出前に安易に依存することなく、主体的に埋蔵文化財を活用し得る能力を身につけることが期待されている。このことは、群馬県の「職員の出前」から「教員の自前」という視点から明らかである。
- (3) 職員が行うべきことを明確にしていること。群馬県ではティーム・ティーチングによる授業方法を選択し、栃木県では職員が中心となるが、その方法は教員が行うような方法ではなく、児童生徒との質疑応答や対話による方式によって進めている。両者は一見異なるように見えるが、いずれの場合もセンター職員が行うことは、教

員と同じ指導方法ではなく、教員ではないことを生かした、個性的で豊かな方法によって進められていることに特徴がある。センター職員は教員の代替として授業をするのではなく、センター職員固有の知識や技術と方法で展開することによって、学校教育の充実につながると考えられる。それは同時に埋蔵文化財センターの教育普及活動としても意味があると考えられる。

- (4) 地域性や発掘調査や研究と結びついた体験活動プログラムが提供されていること。特に栃木県の体験活動プログラムにみられるように、埋蔵文化財センターが提供する体験活動プログラムは、当該地域での発掘調査を背景とした実証性の高い体験活動が可能となる。こうした体験活動は、その後の児童生徒の気づきや振り返りを豊かにし、その後の学習の発展や継続性を高める可能性がある。体験活動と埋蔵文化財（実物資料）と遺跡（包蔵地や古墳、集落跡など）が一体化することによる教育効果が、埋蔵文化財センターの教育活動の特質であろう。

博物館の存在意義を求め 利用者誘致とボランティア養成— 「ボランティア体験講座」の一側面

(財)北海道開拓の村
中島 宏一

北海道開拓の村（以下、開拓の村）では、平成13年度から「博物館ボランティア体験講座」を開催し、博物館ボランティアの普及と振興、開拓の村ボランティアの誘致を図っているが、本稿では2002（平成14）年9月の土・日曜日の2日間にわたって開催した「第2回博物館ボランティア体験講座」について、ボランティア養成の視野から実践報告として紹介したい。

事業企画の背景

開拓の村は、1983（昭和58）年、札幌市郊外の道立自然公園野幌森林公園内にオープンした野外博物館である。現在、60余棟の歴史的建造物を道内各地から移築・復元し、年中行事や伝統技術の再現、生活体験事業を展開して年間22万人強の来村者を迎え入れている。

年間の来村者数は近年減少傾向にあり、オープン時から1992（平成4）年頃までは平均30万人以上数えた来村者数が以降は減少傾向を示して2001（平成13）年度には21万人台まで落ち込み、また年間の事業予算も年々減少している。数字だけを見ればまさしく「悪循環」であり、博物館としての存在意義を問われる状況にある。

利用者誘致とマネジメント

行政の博物館に対する評価は、利用者数が一つの目安となり、内容面は副次的要素である。一方、現場、特に普及部門では内容を第一と考え、それは利用者の評価にも直接反映される。我々が展開する事業に相当の評価を与えられ、リピータやファンを増加させることが行政がいう利用者増に波及し、ここには学芸職員の存在意義をアピールする狙いが当然包含されている。したがって、安易な企画と事業内容には妥協は許されない。

予算の減少と普及事業の減少は比例するのであろうか。同じ社会教育機関である「図書館」の運営を左右するのは図書購入費の増減である。図書館では限定された予算の中で、新刊書の整備、開館時間の延長、読み聞かせ教室といった地域性や住民層、利用者のニーズに見合い、先取りした方策を取ることで存在意義を示している。また、図書館のネットワークも構築されつつあり、市町村立と県立系の役割区分が徐々に利用者にも理解され始め、利用者が自主的に利用方法を選択する素地が形成されつつある。

博物館マネジメント面でも、特別展示や行事のPRで利用者誘致を図るのではなく、博物館の使い方や特徴を広く地域に周知することが重要であり、地域住民が積極的かつ恒常的に博物館活動に参加することにより、当該博物館の存在を地域に知らしめることになる。この事業ではその対象を「ボランティア」とし、ボランティアとして博物館活動に参加し、新たに身につけた技能を個々の生活の場（地域）に発揮し、博物館と地域の双方向のチャンネルを果たす役割をボランティアに期待することを模索したのである。したがって「博物館ボランティア体験講座」は、開拓の村を取り巻く環境が厳しくなっていく過程で企画された、ボランティアという地域住民と協働したマネジメントの一手段なのである。

ボランティアの現状と事業の企画

現在（平成14年度）、開拓の村には180余名のボランティアを登録している。平均年齢は、1987（昭和62）年の制度導入以来65歳前後で推移しているが、近年の傾向として、学生や就業者が複数登録されるようになり、博物館ボランティアに対する意識が変化、多様化することを意味している。平均活動年数は7年から徐々に短期間化しており、また単年度や途中で辞退する傾向も多く、ボランティア個々の意識と当村の活動意図との不一致、事前の相互理解の不足等が問題となっており、「博物館ボランティア」全体に関わる理解の促進が性急課題となっている。

一方で、個々の意識は来村者に「教える」のではなく、「学び合う」姿勢に変化している。ボランティアとして博物館を利用し、相応の事前知識は必要としながらも、日々訪れる新しい来村者との「語り」を通して新しい知識を身に着ける。これは、博物館活動に参加する地域住民の意識や利用方法が変化し向上し始めていることを示唆している。

そこで、地域社会に対する「博物館ボランティア」の理解促進を通して「博物館の存在意義」を広く普及するため、次のようなプログラムを企画した。事業の実施にはボランティアの協力が必要なため、事前に事業プログラムとボランティアに期待する「役割」を周知して賛同者を募り、事前ガイダンスを行った結果、40名強のボランティアが運営に参加することになった。

企画立案の課題
<p>【住民（ボランティア）側のニーズ】</p> <p>①博物館ボランティアが何をやるかわからない。</p> <p>②博物館に何故ボランティアが必要とされているのかわからない。</p> <p>③博物館の利用方法がわからない。</p> <p>【開拓の村のニーズ】</p> <p>④道内には38の博物館・園でボランティア制度を導入しているが、その活動内容について、一括した情報提供がなされていない。 特に人口200万人を超え、住民移動が盛んな札幌近郊における博物館ボランティアの円滑な情報提供手段が構築されていない。</p> <p>⑤住民個々の目的意識に見合った博物館ボランティアを紹介したい。</p> <p>⑥開拓の村及び利用者がボランティア個々に期待する役割を意識してほしい。</p> <p>⑦開拓の村の活動に対する理解を促進したい。</p>

効果

第1回目は106名の参加者を集め、博物館ボランティアに対する関心の高さを再認識した。しかし、参加者からは内容が開拓の村に偏重し過ぎる、ボランティアの案内方法がアンバランス等々低い評価となった。これは、ボランティアとの協働で進行するにもかかわらず、開拓の村としてボランティアとの意思疎通に配慮が不足したことが最大の原因であった、というよりも、ボランティアに頼り過ぎたと解

【期待した効果】
<ul style="list-style-type: none"> ・他館ボランティアの活動状況の把握 ・個々の活動姿勢のあり方 ・博物館ボランティアの役割 ・個々の達成感 ・参加者（来村者）とのコミュニケーション ・個々の生涯学習の進め方 ・ボランティア活動の楽しみと問題点

ボランティアの意見には、「興味・関心の有無、自分の役割が理解できれば、生涯にわたる自分の行き方を探る上でも、ボランティア活動はこんなに楽しいものだとわかった」（68才・女性、活動歴15年）といった回答があり、ボランティア活動を継続することで個々の学習を深化させ、成長していることを示した「博物館ボランティアの手本」と呼ぶにふさわしい存在であり、開拓の村そして地域にとって貴

プログラム
<p>【各博物館ボランティアの事例紹介】</p> <p>北海道立近代美術館・札幌市円山動物園・札幌芸術の森野外美術館・北海道開拓の村の各ボランティアが自館の活動事例を紹介し、自分に適したボランティア活動の見つけ方の動機づけとする。</p> <p>【博物館ボランティア論】</p> <p>大学専門教授、学芸員による講座を通して、博物館ボランティアの必要性、ボランティアに対する博物館の役割、ボランティアの学習についての理解を促す。</p> <p>【ボランティアによる村内案内】</p> <p>開拓の村ボランティアが日頃の活動の成果（＝学習成果）を発揮し、開拓の村の活動を説明する。</p> <p>【ボランティアによるミニ体験指導】</p> <p>ボランティア活動によって得られる「学びの世界」「出会い」「博物館創り」等を、開拓の村ボランティアが個々の体験を基に示し、初歩的な案内体験指導等相互の交流を通して、ボランティア活動が個々の生涯学習を充実させている実践例を紹介する。</p>

積した方がいいかもしれない。そこで今回は、開拓の村が置かれている状況、事業実施に至る過程、ボランティアに期待する役割、そして、参加者・ボランティア・当村の三者が得られる効果を説明し、意識の共有を図ることにした。すなわち、ボランティアに対するコーディネートに加え「ファシリテート」的機能を駆使したのである。

事業終了後にボランティアに対するアンケート調査を行い、次表のような回答（※要旨）を得た。

【ボランティアの回答】
<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの基本的な考え方を確認 （自分が楽しく、利用者との楽しみの共有、自己の学習の向上等） ・他館ボランティアとの交流の素地 ・ボランティアの育成には最良の事業 ・活動のマナーリズムの打破 ・ボランティアは村の「顔」と、誇りをもって活動 ・来村者に喜んでもらったときの達成感 ・生きがいある日々をボランティア活動で見出した ・開拓の村は誰のため、何のためにあるのかを強く意識して活動

重なる人材である。この他にも「事前ガイダンスをもっと徹底してほしい」「ボランティアの意見を取り入れた企画を立案」、そして「これからの博物館はお客様の立場に立った発想を重視すべき」「若年層のボランティアに対して、村のどのような対応をするのか」「ボランティアに対する姿勢が甘い」等、積極性を帯びた数々の意見があった。また、参加したボランティアからは「新規登録者の事前研修には

我々ボランティアが村内案内をしたらどうか」、という意見が出された。ボランティアに自信と役割が理解されつつあることを知った。

こうした意識あるボランティアがリーダー的な存在となり、個々が担う役割や活動意識の向上に努めることによって、より一層「開かれた」博物館活動が展開をするであろう。

今後の課題

なぜ、一博物館に過ぎない開拓の村で「博物館ボランティア講座」を実施する意義があるのか、教育委員会等主催で行うべきではないか、といった意見もあり、この事業に対する部内の全面的な賛同を得ているかどうかは疑問である。しかし、博物館には各館独自の機能があり、特に人的な機能では、学芸職員、ボランティア、そして利用者が博物館で確立した役割を担うことは重要な要素である。開拓の村のようにボランティアが博物館活動の一翼を担う博物館では、ボランティアの位置づけを強く地域にアピールすることにより、地域とともに歩む博物館としての存在が理解され、地域住民の恒常的かつ意識ある利用形態が育まれていくこととなる。

一方、ボランティア導入館ではボランティア育成（養成）もまた使命であり、ただ導入して役割を依頼するだけでは「安価な労働力」となり、博物館ボランティアではない。「役割」とは仕事の分担ではない。ボランティアの「役割」とは個々が活動を継続し、学習していく過程で自ら発見する「学習成果の証」である。この「証」を博物館活動で発揮させることによって、博物館ボランティアとしての「役割」が自他に表現されるのである。さらに、この「証」を個々の生活の場や地域でも発揮することを期待している。博物館におけるボランティア育成とは、博物館活動を理解させ、博物館が決めた活動方針に則して活動するボランティアを作り上げるのではなく、社会教育機関として、個々の生涯学習を支援するために、ボランティア活動を通して「未知の知識や技能の習得」「既経験の技能の応用・発展」等を自ら育むことを支援し続け、博物館と同じ目的意識を有し、共有する住民をより多く地域に輩出することにある。

「博物館は誰のため、何のためにあるのか」

ボランティアが投げかけた言葉は、我々学芸職員が常に考えるべきテーマである。博物館はなぜ利用者数を気にし、その増加を目指しているのか。博物館の存在をより多くの人々が知り、その活動を理解してもらうことで地域の社会教育機関としての存在意義を示し、利用価値を高め、リピータを確保・増加させるためではないか。こうした観点からすれば、地域住民で構成されるボランティアは利用者の一人なのである。但し、継続して利用する人々なので「頻繁な利用者」である。この頻繁な利用者たるボランティアに対して、学芸職員には彼らが望む学習

成果を達成させるための支援、彼らの成長を認識し継続的・系統的・段階的な学習支援が可能な専門性を備えているのか、換言すれば博物館にその体制が整備されているのか。

博物館にとって、利用者誘致とは「一見」の利用者を誘致することが目的ではない。博物館を楽しむに、博物館に期待する人々を一人でも多く地域にもつことである。地域住民は博物館のサポーターであり博物館もまた地域住民のサポーターとなり、地域の「核」となる関係が成立して、博物館は存在を地域に示すことになる。

現状として、開拓の村がボランティアに対して円滑な学習支援を行っているとは言い難く、その分野では他館よりも大変な遅れをとっていると思う。しかし、今回のようにボランティアとの協働事業を増加させていくことにより、より多くのボランティアとの意識を共有し、彼らのニーズに対応し成長を促進する学習支援を徐々にでも構築したいと思っている。博物館と地域とを「線と面」で太く、そして幅広く結ぶボランティアは、博物館にとって重要な役割を果たす住民であり、貴重な人材である。彼ら地域住民とともに未来を創り続ける博物館である限り、その存在も地域に確立された意義づけがなされることになる。これは私の痛切な願いである。

この事業については、第1回と2回を通した一連の流れの中で、企画や実施方法、ボランティアの関わり方、参加者の反響、そして効果等について、別途報告する機会を設けていただき、博物館関係者皆さんのご意見とご指導を賜りたいと思う。



写真1 博物館ボランティアの事例発表

左端は、進行役の北海道大学教授 木村 純氏
パネリストは、左から札幌市内円山動物園ボランティア、北海道美術協会のボランティア、札幌芸術の森野外美術館ボランティア、北海道開拓の村ボランティアの4名。



写真2 ボランティアミニ体験の風景

2~4名の参加者に1名の開拓の村がつき、村内を案内しながら交流を図る。



ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネジメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

博物館とミッション

『さがそう！間違い？科学館』での試み

株式会社乃村工藝社

文化カンパニー企画プロデュース部 広沢公太郎

きっかけ 逆転していた地球儀

博物館の展示は正しいのが当たり前であるが（実は誤字脱字にはじまり間違いは少なくないらしい）本企画展『さがそう！間違い？科学館』では展示に科学の原理や法則を否定する間違いやトリックを意識的に仕掛け、その間違いやトリックを観察や実験と、これまでの経験や知識を総動員してその謎を解いてもらおうという企画でした。発想の原点は沖縄海洋博覧会で使用した海底地球儀を某博物館に再展示した時の事件による。再展示から1ヶ月がたったとき、博物館から地球儀の自転が逆であると連絡があり早速調整に駆けつけたことにはじまる。逆である事は、入館者の親子が太陽はなぜ東から昇るのかをその海底地球儀（既にマントル対流の様子を観察するという展示目的から外れている。展示の目的とどの様に見るかが一致するとは限らない）を使って父親が説明しようとしていたのであるがどうしても目の前にある地球儀が正しいとすると西から昇ってしまうし、博物館の展示に間違いなんてあるはずがないし、ということで悩みに悩んだすえ思いきって問い合わせをしたそうです。学芸員が飛んできて間違いが1ヶ月後に発見され、父親は尊敬を勝ち取り展示業者の面目は丸つぶれとなった次第です。しかし転んでも只では起きないのが商売人。これは面白い展示になるぞと頭の中にファイルされたのでした。この親子にとっても長時間に渡り、地球と太陽の関係は仮説を立て、確かめてみるというプロセスを踏み深く実地で理解するという博物館本来の目的が達成されたのですから。

ミッションの重要性

私事ではありますが、私はJ-1浦和レッズで有名な旧浦和市の住人です。サッカーが名物の地元で小学生対象のサッカー少年団のコーチを12年やっています。子供たちと接していて1番に感じることは、4人対4人から8人対8人ぐらい試合形式の『ミニゲーム』がとにかく大好きということでした。その理由を考えてみたのですが、

- ① 得点を多くあげたほうが勝ちという明快なミッション。
- ② ゲームはやってみないことには勝敗が分から

ない、同じゲームは決してなく、1回1回自分たちが作り上げていくという創造的活動であり、かつゲームに勝利するというミッション自体がとっても楽しいエンターテインメントである。

にあると解かった。基礎練習ではきまって砂遊び（この遊びも子供は異常に好き、トンネルを作ったり、蟻を埋めたり6年になってもやっている）に逃げる子もミニゲームは目を輝かせてやっている。博物館においても明解なミッションとそれを成し遂げるプロセスが楽しいことを用意する事は外す事の出来ない要素であると考えます。

技の向上はとても楽しい

さいたま市ではこれら少年団の指導者の育成にも熱心で浦和地区の36のサッカー少年団だけで400名以上の指導者が登録され常時活動している。指導者講習会では子供の身体成長における注意事項や指導法、ルールを守ることの大切さの徹底等を学ぶのだが、こんな事も話題になった。体育館や競技場いわゆる『はこもの』にくもの巣を張らせないには、APCLIを頭文字にする5つのサービスが必須であることも伝授された。それは

AREAサービス、整備された場の提供。シャワーも欲しい。

PROGRAMサービス、四季・老若男女向けの競技メニュー。

CLUBサービス、スポーツと一緒に楽しむ仲間作り。LEADERサービス、上達のための指導、競技のための審判。

INFORMATION、広報サービス

特にLEADERサービスは重要で身近なミッションの確認や上達のためのコーチング・情報提供がタイムリーにパーソナルに行えるので、利用者のスキルの向上が早くなる。

子供の口癖に『これから〇〇やるから見てて』『いまのシュート、パス見てた？どうだった？』があります。子供は自分の技の評価をきちんと求めます。そして向上が認められたときとても喜ぶ。正当な評価を子供は厳しく求める。博物館においても入館者の観察力や知識の向上（＝博物館での楽しみ）のためのリーダーサービスや多様なプログラムサービスはますます重要になってくるでしょう。

本題

さて本題である。企画展『さがそう！間違い！科学館』は、国立科学博物館主催により、2002年9月11日から1ヶ月間開催された。展示の中に意識的に仕掛けられた間違いやトリックを探すことをミッシ

ョンにした展示であり、謎を解いて行くというエンターテイメントの要素を盛り込みました。その仕掛けの仕組みと意図を解説しています。展示は館長の挨拶からはじまります。

《館長の挨拶》

『間違いだらけの科学館』によろこそ。おかしな名前だと思われるでしょうが、残念ながら展示物に、それぞれ一ヶ所『間違い』があるのでいたしかたない。展示物は、私の教え子や『科学館友の会』の方々からのプレゼントなのだが、手紙のいいまわしがやたら丁寧なのがどうもあやしい。どうもわしを引っ掛けようとわざと間違いを仕掛けているようだ。近頃は出入りの営業マンまでわしを引っ掛けようとしているようじゃ。しかしわしをひっかけるなどとは、100年早いというものじゃ。すべてお見通しじゃ。しかしこういう『間違い』をそのまま展示して、科学ファンの連中をだますのも、興味深い。『館長、あの展示は間違っているではありませんか・・・科学館が間違ようじゃこまりますね・・・』などと抗議でもくれば大成功。きちんと理解せねば、抗議はできぬからな 楽しみ楽しみ。皆さんもよく観察をされて、『間違い』をみつけてください。ただし手紙のいいまわしや文字については、書いた人の意思を尊重し、原文のままにしてある。間違いは展示の中にそれぞれ一ヶ所づつある。なに？間違いが、どうしてもわからないときはどうすればいいかだと？心配御無用。私のノートをつるしておくから、それで確認されたらよい。健闘をいのる。

このように展示物は某科学館の館長宛てに送られてきたもの、そして怪しげな手紙が添えられていて謎を解いて行くという趣向になっている。

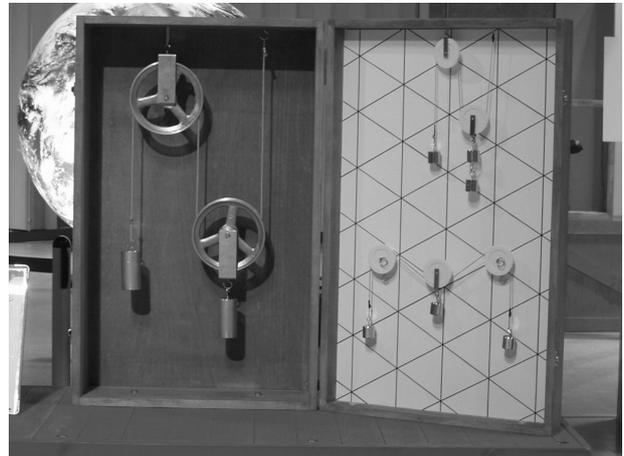
読まれないあいさつ文

この挨拶文は入り口に掲げられていたのであるが、ほとんどの人は読まないことが分かった。確かに企画展での挨拶文はなぜか読まれない傾向が強い。ガイドが読んで聞かせるというようなことをしない限り読まれない。よって企画の意図はあまり理解されないまま展示を見始めることになってしまった。

軽くならないどう滑車

人気のあった展示『軽くならない動滑車』で展示の説明を試みよう。動滑車という滑車をご存知であろうか。アルキメデスの時代には、土木などに使われていた仕組みで物を吊り上げるときにその滑車が上下に動くのでこの名前がついた。井戸のつるべに使われている動かない滑車は定滑車とよばれ動かない。ガリレオはこれらの滑車を組み合わせてクレーンの原型になったものを考案している。動滑車は写真1のようにロープ2本で重りを持ち上げている。2本で1つの重りを支えるので1本には

写真1



重りの半分の力がかかる。定滑車を介してバランスさせるには半分の力で済むのである。これが動滑車であり試験問題では動滑車の下の重りは2個で定滑車には1個が答えとなる。写真右上の模型が常識通りの動滑車。ところが左の大きな動滑車は軽くなるどころか1個でバランスしているのである。しかも実験しても仕掛けはなかなか見つからない。次は展示物に添えられた館長宛ての手紙である。

《科学館の相談ポストにきた投書より》

ポクは理科が大好きで科学博物館には毎週きています。いま学校で滑車をならっていますが、教科書には「定滑車は力の向きを変えるだけだが、動滑車では力が半分になる」と書いてありました。はやく実験がしたくなって、自分で作って見ましたが、何回やっても半分になるどころか、定滑車と同じで、等しい重さでつりあってしまうのです。これは新しい原理を証明する装置になるのではないかと、むねがドキドキしました。作った実験装置と教科書のコピーを送ります。あたらしい原理を証明する実験装置としてぜひ展示してください。

実験の大好きな科学少年より

この問題は結構難しく当社の理工系出身の若手頭が柔らかいはずの社員にもやらせてみたがほとんどわからない。机上での知識の先入観（注1：先入観の内容は後述）が壁になっているようである。30分から1時間かけて分かるものもある。解いた人間に聞いてみると、1つ1つ検証を重ね知らず知らずのうちに科学の方法、『観察・推論・仮説設定・実験・検証・法則化』を実践していることが分かった。この中でも仮説を作って自分の頭の中でその仮説と対話（自己内対話）をしているようである。読者の方も写真を参照に軽くならない動滑車のどこにトリックがあるのか探してみてください。答えは最後に館長の手紙にしています。

蕪村は天文学者？

次に文科系の問題を紹介します。

蕪村の名句に『菜の花や月は東に日は西に』があります。その情景を絵にしたものが写真2です。天

写真2



体は望遠鏡の発明のはじまりガリレオの土星の輪、惑星の軌道を正確に計測し法則化したケプラー、そしてニュートンの万有引力の法則に至る科学の基礎を作った観測対象である。昨今では小柴博士のニュートリノや東京天文台での重力波検知の挑戦など天体は話題に尽きない。さて蕪村これは六甲山頂からの夕日と月の出の句である。この夕日と月の出が同時になるときは結構皆さん体験していると思う。太陽と地球そして月の位置を想像してみてください。そしてこの絵の間違いを発見して欲しいのです。結構月の満ち欠けがどういう仕掛けで起こるのか知っているつもりでも結構知らないものです。これを機会に思考実験を試みてください。解答は末尾に示します。

解説ニーズはたかい

今回の企画展では4人の専属インタープリターが展示の解説を会場で適宜行っていました。解説文を読まない入場者も展示の意図が分ると結構難しい問題にも積極的に挑戦していました。実際に触ってもよいこともあり、順番を待って実験をする方も多くいました。間違いやトリックが分かるととてもうれしそうにされる方が多いのにも驚きでした。滑車とか電磁誘導なんかまったく分からないといっていた子供づれのお母さんが子供より熱心に実験をする姿を結構見ました。そして「そうだったんですか、ずーと謎だったことがやっと分かりました」などと満足しているのに展示サイドも勇気付けられました。4人のインタープリターも実際には不足気味で、その時結構積極的に解説役をこなしていたのがなんと警備の方々でした。警備の方々にも展示の意図を最初に説明をしたのですが展示の前で戸惑っている人を見かけると手際良く解説をしていました。解説を始めると混雑時には必ず人垣ができました。このように展示の意図や展示の内容をきちんと解説する、解説は人に合わせてするのでよく伝わるので滞留時間も長くなる傾向が出ました。展示解説のニーズは高いことを実感した次第です。

展示の面白み→分かることは面白い

このように展示意図が分かってくると、展示を見る目線、ミッションとでもいうのでしょうか展示との会話、自己内対話も始まります。分かるということの喜びの提供はとても大切なことと感じました。この喜びの提供メディアとして人の話す力の大きさを改めて実感しました。

《軽くならない動滑車に対する館長からの返事の手紙》

うーん。なつかしい間違いじゃのう。間違いの定番といわれているものじゃ。みんなこれにはよく引っ掛かる・・だから科学少年君、わしが引っ掛かるわけは無いんじゃ。しかし自分でやってみるということはとても大切なことじゃ。ちょうど1対1で釣り合うようにオモリを調節するなど、よく考えてあることはほめてあげよう。なに？どこが間違いなのかわからないじゃと、オモリに釣り合っているのはオモリだけなのか・・動滑車そのものはどうなのか、よく観察してみよう。そう動滑車の重さが重りと同じ重さに調節してあるのです。ですからちゃんと原理通り動作しているのです。

館長より

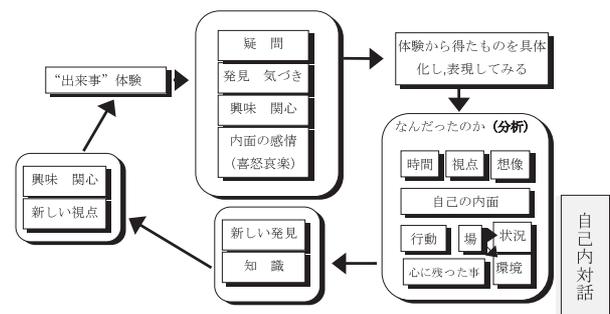
注1

学校の試験では、動滑車の重さは無視して良いと習う。特に理工系の人間は動滑車＝重さ0の先入観がある。

《月は東に日は西に対する館長の手紙》

月が東で日は西にということは調度夕方6時ころ、太陽、地球、月が1直線に並び日本の位置が月も見えて、太陽も見える位置にあるということこの句は詠っている。当然月は満月ということになる。6時間後地球は90度回転し日本の位置は最も月に近づき満月は真南の天頂に輝いている。本当の1直線になったときは月食が観測される。月と太陽の地球からの見かけの大きさが何たる偶然同じなので日食が起こるのです。

注2 自己内対話



横浜市立笹野台小学校教諭平野成昭氏作成による「学びのエンジン」。間違いを探すと興味をスタートに実験などの体験を通じ仮説を立て（体験から得たものを具体化し、表現してみる）分析に至り、自己内対話が行われ、あたらしい発見に到達する。これをベースに新しい視点が広がっていく。という学びのサイクルを完成させるというミッションを提供することが本企画の意図だったのです。

特別事業開催報告

2002年 第2回JMMA 特別事業の実施報告

JMMA理事・特別事業実行副委員長
高安 礼士

テーマ：～FORUM～ミュージアム・コミュニケーション

主催：日本ミュージアム・マネジメント学会

共催：文化環境研究所

協力：東京大学大学院教育学研究科社会教育学研究室

1. 趣旨

ミュージアムの今日的課題である「博物館教育」「地域連携」「利用者研究」等を考える際、「コミュニケーション」は重要なキーコンセプトである。今後のミュージアムの在り方を学際的に考える新しい学問分野の基礎理論を構築するため、博物館の中や社会とのかかわり等のさまざまな視点から「ミュージアム・コミュニケーション」を検証・議論し、わが国の博物館研究と運営向上に資することとする。

2. 参加者

日本ミュージアム・マネジメント学会員、研究者、学生、博物館関係者等（164名）

3. 期日

平成14年12月8日（日）9：30～17：30

4. 会場

学術総合センター
（東京都千代田区一ツ橋2丁目1番2号）

5. 企画

コミュニケーションとは、あるものとあるものとの間で行われる「情報の交換」や「意志の疎通」や「心の交流」「物事の伝搬」「交友」等を意味するものである。そこには必ず、「伝える内容」「主体と客体」「媒介手段（メディア）」が存在する。ミュージアムにおけるコミュニケーションといえば、博物館内におけるコミュニケーションは「博物館職員間で行われるもの」と「利用者との間で行われるもの」に分けて考えることができる。また、「同種の博物館における資料・情報を媒介とした交流や協働にともなうコミュニケーション」、「館種の異なる博物館では教育普及事業等での連携等を求めるコミュニケーション」、「同一設置主体による博物館の連携事業などの



コミュニケーション」などが考えられる。

最も基本となる「利用者とのコミュニケーション」をはじめとして、一般化した（拡張した）博物館教育活動を考え、さらに地方博物館協会や博物館の全国的協会等におけるコミュニケーション等も考えることができる。

今回のテーマである「ミュージアム・コミュニケーション」を考えるに当たって、コミュニケーションの行われる場として「今日の我が国の社会と博物館」「各博物館の内部」「博物館と利用者」「現代社会における活動体としてのサイエンス・コミュニケーション」の4テーマを想定し、「博物館におけるコミュニケーション理論」を単に「利用者とのコミュニケーション」、「博物館資料とのコミュニケーション」や「博物館同志のコミュニケーション」といった「個別的テーマ」に限定せず、社会学的な文脈から考えるミュージアム・コミュニケーションとして考えることとした。

- ① 認識としてのコミュニケーション—博物館における調査・研究とその文法—
 - ・博物館の成果と常識
 - ・博物館における調査・研究と教育普及活動
 - ・資料論と展示論
- ② 現代の社会から見たミュージアムの使命
 - ・博物館の社会的役割／現代コミュニケーション理論
 - ・教育／マスコミ／人間と博物館／博物館のもてなし
- ③ 交流としてのコミュニケーション—ことば、展示、解説、教育—
 - ・博物館における展示と教育活動を有効にするために
 - ・ミュージアム・サービス
- ④ 活動体としてのコミュニケーション—歴史、博物館の原理・理論、未来への提言—
 - ・博物館の運営構造とコミュニケーション／情報発信体としての博物館／歴史と理論
 - ・サイエンスコミュニケーションの姿

6. 実施内容

- (1) 開会・大堀会長挨拶
- (2) 基調講演：「ミュージアム、そのコミュニケ

ーションと学び～文化をつくる新たな社会的役割～」レスター大学Eilean Hooper-Greenhill教授

(3) フォーラムⅠ：博物館の文法「学芸員の使命を考える模擬討論」(寸劇仕立て)

佐々木秀彦氏と水嶋英治氏の企画による、博物館の研究や運営にかかわる「先生」「留学女史」「研究者君」の模擬討論を実施した。博物館教育を主張する「留学女史」と資料の収集研究を主張する「研究者」との意見対立に対して、カードによるアンケートを実施した。結果は、70%の参加者が、教育重視を主張する「留学女史」を支持した。



(4) 各フォーラム

フォーラムⅡ：「ミュージアムにおける交流領域の未来～よりコミュニケーション効果を高めるために～」

発表者：

大月 ヒロ子 氏 (アイデア代表)：人々の日常生活に組み込まれてこそ生きてくるミュージアム

菊池 眞太郎氏 (前浦安市郷土博物館長)：博物館建設で揺れ動いた行政と市民

山田 英徳氏 (日本科学技術振興財団理事)：科学技術館「ユニバース」活動に見るミュージアム・コミュニケーションの拡がり可能性



フォーラムⅢ：「交流としてのコミュニケーション」

発表者：

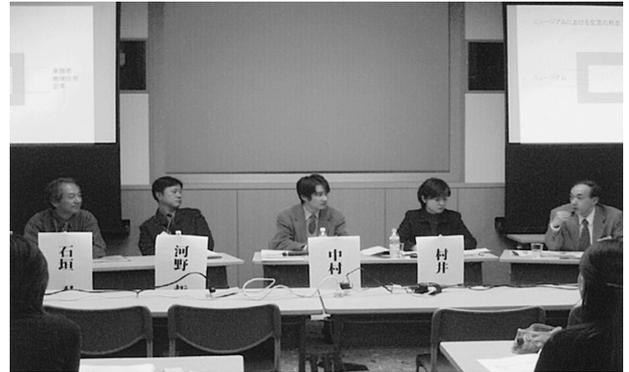
石垣 忍氏 (林原自然科学博物館副館長)：観客とコミュニケーションする展示を作る

河野 哲郎 氏 (東京国立博物館)：音声ガイドについて

中村 隆 氏 (科学技術館企画開発部)：演示のスタ

イルとスタンス

村井 良子 氏 (プランニングラボ代表)：対利用者、対納税者、対社会とのコミュニケーション



フォーラムⅣ：「サイエンス・コミュニケーション」
発表者：

川人 順子 氏 (科学技術館)：“科学体験活動”が広がる今、科学館にできること

小泉 成史 氏 (テレビ朝日コメンテーター)：サイエンス・コミュニケーションって何？

鳩貝 太郎 氏 (国立教育政策研究所)：わが国の「学力」の傾向について—国際学力調査の結果から—

本多 ささわ 氏 (国際イルカ・クジラ教育リサーチセンター)：ボランティアによるバンドウイルカのフィールド調査と環境教育

提言：「我が国のミュージアムとコミュニケーション」：逢坂 恵理子氏 (水戸芸術館)



(5) まとめ

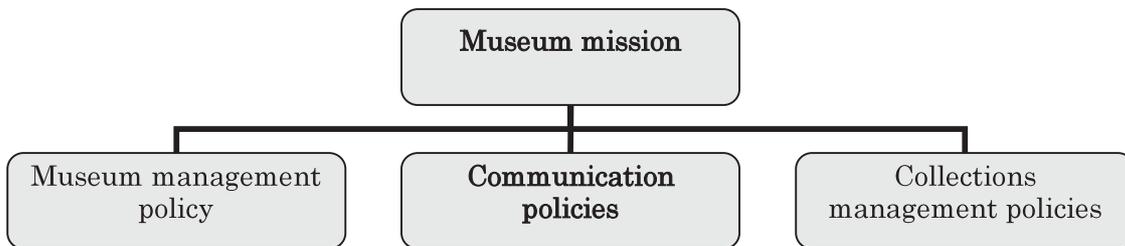
イギリスのレスター大学Eilean Hooper-Greenhill教授によれば、イギリスでは長い間、「博物館教育 museum education」は学校団体の博物館見学に対応したクラスルームでの指導活動を指すものと考えられてきた。しかし、博物館の教育の中心はあくまでも展示であり、教育は博物館全体の問題として論じられるべきであるとして、全体論的なアプローチ holistic approachの必要性をこれまで一貫して主張している。

今回の発表の中でも、「博物館に歓迎されていると感じていない人々」や「来館したとしても使いにくさを感じている人々」の存在の理由を「一方通行のコミュニケーションで良し」とする19世紀型の博物館の理念に原因があると述べている。

エドゥケーターの仕事は展示・展覧会の企画・開発から、来館者調査の実施、教育普及事業の運営・管理におよぶ非常に幅の広いものとして認識されなければならないとして、Hooper-Greenhillの関心は、1994年の段階ですでに、博物館の「教育」から「コミュニケーション」へと拡大する兆しをみせていた。ポスト・モダニズムや構成主義、カルチュラル・ス

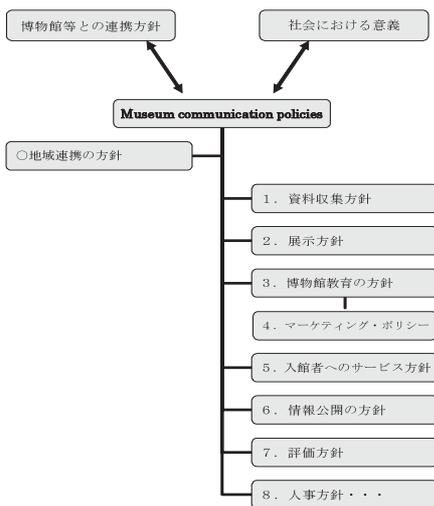
タディーズ、解釈学hermeneuticsやコミュニケーション理論、批判的教育学critical pedagogy、とまさに学際的な展開をみせ、今回の基調講演の中では、ガードナーの理論に基づく、ミュージアム教育における「新たな学びの構築」と「その成果の証明」を提言している。また、そのためには教育活動はさまざまな文脈からの展開が求められ、「文化的背景の理解」や「暗黙知の獲得」の必要性を提言しました。そのためにも、利用者研究が必要であり、ターゲットの分析や展示評価、恒常的な博物館評価が必要であると述べました。

図-1 Eilean Hooper-Greenhill、『Museum and Gallery Education』（1991）、p190



Hooper-Greenhillの著書によれば、博物館運営の構造は図-1のように、コミュニケーション・ポリシーが博物館教育、地域連携や博物館の社会的使命を果たす上で大変重要なものと考えられており、今回の発表では利用者（visitors, audience, publicに3分類される）研究に基づく博物館運営の構造が説明されている。（図-2参照）

図-2 コミュニケーション・ポリシー



さて、わが国における博物館の教育普及活動はどうか。1970年代までは、現行の博物館法を理想として、「博物館資料を対象とした解説活動」として展開してきた。その後、科学館の建設ブームが起り、アメリカ型のサイエンス・センターやチルドレンズ・ミュージアムの操作体験型の展示思想やハンズ・オン展示の考えが導入されることによって博物館教育

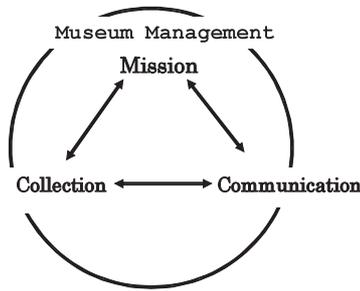
は大きな変容を余儀なくされた。また、情報化社会の到来と美術館のワーク・ショップのブームが起り、展示資料や収蔵資料から独立した「教育普及活動」や「デジタルの情報提供活動」が積極的に行われることとなった。さらに1990年代の自然史博物館の建設ブームと生涯学習体系への移行政策の中で、開かれた博物館づくりや地域との連携活動、博物館の入館者調査、博物館経営評価活動、親しむ博物館づくり、博物館情報の提供等の活動が、博物館教育に大きな影響を及ぼした。

第一段階としては展示資料解説の重視、第二段階としては博物館資料を活用した教育活動重視、その後利用者のニーズや生涯学習社会の要請に応じた博物館活動として「博物館資料情報の公開」「学校利用の促進」「教育的資料の製作」「ミュージアム・ショップ」「アウトリーチ活動」等の充実を目指すことによって、博物館教育は拡大してきた。

そこで今日では、各博物館では必ずしも収蔵資料に基づく「教育普及事業」に限らず、さまざまな催し物や学校教育に対応した「拡張した教育普及事業」を展開することとなった。これらの拡張された博物館活動は、狭い意味での「博物館教育」を越え、生涯学習に対応した幅広いテーマから地域の文化創造や経済効果等までも目的とした活動となり、地域社会との交流・連携活動となっている。

さて、これらの博物館を中心とした幅広い教育活動を、私たちは「ミュージアム・コミュニケーション」と呼ぶことにしよう。そうすることによって、博物館内の資料を中心とした教育活動から地域社会との連携や課題に応じた博物館活動まで、一つの新しい「博物館の活動領域」として取り扱うことがで

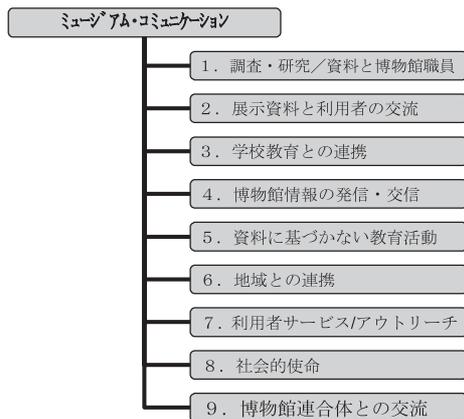
図-3 新しい博物館機能の関係



きる。「ミュージアム・コミュニケーション」とは、このような「新しい文化創造」という意味を持った新しい博物館機能の概念として、博物館研究や博物館経営論で扱うことによって実り多いものをもたらすこととなるであろう。

「資料との対話」に始まるミュージアム・コミュニケーションは、「展示資料と利用者の交流」「資料に基づかない教育活動」「アウトリーチ活動」「人與人」「学校教育との連携」「地域との連携」「組織と人」「組織と組織（博物館連合体との交流）」、また最終的には「社会における博物館の機能」となる。それらの各段階では、まるで一つの生命体のようにある時は物質的な移動を伴うコミュニケーション（交流）を行い、またある時は情報という非物質的なものによるコミュニケーションを行いながら、その外界との調整を行っていく。それらの博物館活動の各段階を「コミュニケーション」という視点からその機構やしくみ、効果や成果、評価と改革等を科学的に分析することによって、より普遍的な博物館の姿が見えてくるに違いない。

図-4 拡大された教育活動とミュージアム・コミュニケーション



水戸芸術館の逢坂恵理子氏は「我が国のミュージアムとコミュニケーション」と題した提言講演で、このような考えに基づいた「ミュージアム・コミュニケーション」の問題を、博物館の使命と運営についてより具体的に「コミュニケーション・ポリシー」として紹介しました。

今回のテーマである「ミュージアム・コミュニケーション」は当学会の数年間に渡るテーマでもあり、

今回の特別事業をきっかけとしてさまざまな取組みが展開することが期待されます。

なお本フォーラム終了後、懇親会と日本ミュージアム・マネージメント学会の学術会議登録の祝賀会を兼ねた交流会が開催されました。

7. 実行委員会

今回の特別事業は、学会事業として「実行委員会」を設置して、準備・実施いたしました。6月から準備を進め、毎月1～2回の実行委員会を開催し、我が国に馴染みの薄かった「ミュージアム・コミュニケーション」についての勉強会や運営準備を行ってきました。

2002年度 日本ミュージアム・マネージメント学会特別事業実行委員会名簿

委員長	理事	川津尚一郎
副委員長	理事	高安礼士
実行委員事務局長		高橋信裕
実行委員		小川義和
実行委員		亀井修
実行委員		齋藤恵理
実行委員		佐々木秀彦
実行委員		竹内有理
実行委員		中野雅之
実行委員		原秀太郎
実行委員		水嶋英治
実行委員		守井典子
実行委員		山本哲也

参考文献

- Eileen Hooper-Greenhill編『The Educational Role of the Museum』2nd ed., Leicester Readers in Museum Studies, Routledge, (1999).
- Eileen Hooper-Greenhill『Museum and the Interpretation of Visual Culture』, Routledge, (2000)
- Hooper-Greenhill, E. (1982) Some aspects of a sociology of museums, *Museums Journal*, 82 (2), 69-70.
- Hooper-Greenhill, E. (1987) Knowledge in an open prison, *New Statesman*, 13 February, 21-22.
- Hooper-Greenhill, E. (1989) Museums in the disciplinary society, in Pearce, S. (ed.), *Museum Studies in Material Culture*, Leicester University Press, Leicester, London and New York.
- Hooper-Greenhill, E. (1990) The space of the museum, *Continuum: An Australian Journal of the Media*, 3 (1), 56-69.
- Hooper-Greenhill, E. (1991) *Museums and the Shaping of Knowledge*, Routledge, London.
- Hooper-Greenhill, E. (1991) A new communications model for museums, in Kavanagh, G. (ed.), *Museum Languages: Objects and Texts*, Leicester University Press, Leicester, London and New York, 47-61.

アイリーン教授の講演

「ミュージアム、そのコミュニケーションと学び—
ミュージアムの新しい社会的役割—」

アイリーン・フーパーグリーンヒル教授 (英国レスター大学)

JMMA理事・特別事業実行委員
高橋 信裕



英国レスター大学
Eileen Hooper-Greenhill 教授

講演要旨 (同時通訳テープおこし)

現代は大きな社会変革が遂げられている21世紀の初頭である。社会が解放され、地域間、国家間の国境を越えてグローバルな人の動きが見られている。そこではアイデンティティ、同一性が大きな問題となる。それは文化の問題でもある。そこで文化を担う博物館の社会的役割が課題となってくる。イギリスの博物館といった場合、ほとんどが大英博物館をモデルとみている。大英博物館は、19世紀的な起源と権威的なアプローチを持っており、学術的な知識、多くの研究家を抱え、収蔵物に基づいた運営がなされるとともに、学術分野に関わる収蔵物とその背景にある知識や情報が基盤となっている。

イギリスで、どのような人々が博物館を利用していかるといえば、30~40%の成人人口が博物館に来館している。彼等は、豊かな人々、社会的においても教育レベルの高い人達、いい仕事についている人達、ダイナミックな人達である。博物館が国の資金によって成り立っている、あるいは地方自治体の資金によって成り立っているにもかかわらず、なぜ、その活動が社会に還元されていないのか。博物館になぜ、人々は足を運ばないのかの問いに対しては、このような答えが返って来ている。「豊かな人が行くところであり、教育程度の高い、いい仕事についている人々が行っている場だ。」すなわち、普通の

人々には敷居が高い、居心地が悪い場所と受け止められている。一般の自分達が行けば、歓迎されず、また静かにしながら見て回らねばならないし、子どもでもいればなおさら大変な場所だ、いろいろ話したがるし、質問もしてくるし、スタッフがいつも自分達を追い掛け回し、常に監視されているようで落ち着かない場所だ。博物館に行かない人たちにとっての博物館は、こういうイメージをもっている。

また、博物館の空間に関しては、どのように思っているか。静かな場所、来館者である自分達が監視の目で見られているところ、行動が規制されているところ、一定の行動パターンで何かをしなければならぬところ、落ち着かない、快適でないところと思っている人が多い。

ある博物館での話だが、大きな重いドアの前で、ベビーカーに乳飲み子を乗せた婦人が当惑していた。苦笑いしつつ協力しあって、館内に入ったことがあったけれど、博物館は、来館者を歓迎する姿勢に乏しい、と思ったことである。博物館で寒い思いをするとか、監視のまなざしを意識して、ことさら静かに見なくてはならない、といったことであるならば、つまり展示物を理解する努力を来館者自身が、知的にも、物理的にも心がけなければならない、ということは博物館が来館者中心になっていないということである。

カナダの博物館の展示の事例を紹介する。そこでは岩石の展示は、収蔵庫に置かれていると同じ方法になっている。コミュニケーションがない。学術的な知識、地質学に基づいて並べられている。地質学の専門知識をもたない来館者に、どのようにしてコミュニケーションするかということを考えていない。ラテン語でヒトデの学術名がファイラマデキドデルマータと書かれているが、カナダの博物館で、なぜこのようなことがなされるのか。コミュニケーションということを考えていない。この展示は、教示的、一方的ということでも高度な知識を要求しているし、専門家向き技術的用語を使っている。キュレーター(学芸員)が自分達自身に話し掛けている展示ということになる。

次の課題は、コミュニケーションのモデルである。多くの場合、専門家の知識が一方的に、学術的な情報といった形で伝えられる。そこにはキュレーターがメッセージの内容、情報の規制をしていることが認められる。博物館の場合、対象は一般大衆で、博物館はこの大衆の正体は分からないでいる。博物館の職員がコミュニケーションについて、どのように考えているか、展示は誰のためのものなのか、と彼等に問い質したならば、一般の大衆だ、という答えが返ってくると思われるが、これについては疑問がある。ここに提示するのは、簡単なコミュニケーションのモデルだが、コミュニケーター(伝達者)から媒体を通じてメッセージがコード化、暗号化され、これが博物館では「展示」ということになる訳だが、

そうしてメッセージが受け取り手に送られる。しかし、実際にはそこには沢山の受け取り手がいる。キュレーターが何を伝えるのかを勝手に決めて、展示化して、受け取り手に伝達する。フィードバックは、受け手から送り手の間には発生しない。したがって、展示の担当者である学芸員や展示開発者らのメッセンジャーには、これらの情報を受け止める側が、どのようにメッセージを受け止めているか分からない、理解し得ない。これが、博物館の一般的なコミュニケーションのモデルである。このモデルの中では、受けとり手は受動的である。

コミュニケーションには、その背景に技術的な側面での整備が求められる。すなわち、展示ケースのデザインや照明方法、光源機器の選択、展示物の保存・管理、名称・日付・寄贈者等の表示の問題、これらの情報はキュレーターたちの暗号でしかないが、そこには来館者に対して、どのようにコミュニケーションするかということとは考えられていない。展示ケースも展示物も綺麗に展示されている。しかし、来館した人々、母親、家族、子ども達とどのようにしてコミュニケーションを図るかという事は考えられていない。この展示をどのように理解してもらい、関心を抱いてもらうかということも考えられていない。

来館者と展示との関わりについての考え方がない。

コミュニケーションについて戻ると、コミュニケーションは、「文化的プロセス」の問題であって、「技術的なプロセス」ではない。コミュニケーションが依存するのは共有された暗号である言語や知識、ボディランゲージなどである。

コミュニケーションにはインターアクションがあること、双方向であることでお互いの理解が促進される。優れたよきコミュニケーションは事前の知識に大きく左右される。送り手と受け手の知識がマッチングすることが大事であり、そのためのコミュニケーションには、送り手は受け手を知る必要があるし、ニーズも把握しなくてはならない。そして、そのニーズの焦点を絞り、ターゲットを明確にする必要がある。これはアイデンティティともつながる問題である。また、どのように意味付け、学習するか、にも関わってくる。コミュニケーションは、複雑で難しく、多くの努力を必要とするものである。コミュニケーションを享受する来館者は積極的に自分達の意味を求め、コミュニケーションによって納得を得たい人々である。しかし、一般の人々は違う。いろいろな解釈の仕方があり、自分独自の方法で解釈する。同じ事であっても、個々の経験に照らし合わせて解釈が違って来る。

博物館にあっても、来館者を十把一からげの大衆と考えるのではなく、文化的なプロセスとしてコミュニケーションを捉えたとするならば、来館者を個々に対象化していく差別化が必要となる。個々に

それぞれ異なった存在として捉える必要がある。事前の知識、文化的な背景、アイデンティティの問題、彼等がどのように学習してきたかによって、相手の解釈が異なってくるわけで、このことを十分に踏まえた上で情報を発信しなくてはならない。このことは、来館者を中心におく博物館では、配慮しなければならない重要な視点である。マーケティング理論で使われている概念の「ターゲットオーディエンス」(どのような来館者をターゲットとするか)という考え方や、アメリカの学習理論で使われている「マルチプルインテリジェンス」(複数の知力)を考える必要がある。それに加えて学習スタイル、これも個別に分かれているが、これらについて語っていき。そして最後に何が必要か、ということだが、来館者を十分に研究して評価するというところで、結ぼうと思っている。

一般大衆を細かく区分けするという事、オーディエンスでもそれぞれターゲットが異なる、ということを行ったが、私たちの博物館でも1985年以降マーケティング担当者を置いている。彼等はマーケティングの手法を博物館の中で「ターゲットオーディエンス」として戦略を展開している。この企画が誰のためのものなのか、学習のステージも異なり、若い家族なのか、子どもたちなのか、就学児童でも高学年なのか、観光客、高齢者、障害者、車椅子を使う人などなど、ことに博物館となると皆が学習障害者になることも考えられる。一口に来館者といっても、学習の仕方もニーズも違う。ここで「ターゲットオーディエンス」の実例を紹介する。

ロンドンの交通博物館では、5歳以下の子ども達にカーペットを敷いたコーナーを設け、子ども専用のコーナーとして分けし、輸送、交通を大きな玩具で遊びながら理解してもらおうということをしている。彼等の立場になる(英語では「彼等の靴を履く」という)という考えが大事である。

昔の家屋での体験や民族衣装をつけた係員が機織を実演したり、来館者も参加体験できたり、家族連れでは子どもが中心となるが、そこからニーズを探り出すことが必要となる。子ども達は、身体的な関わり、つまり参加し体験するという視点から学習していくという特性を持っている。親は、そこではファシリテーター役となり親が展示や展示物、博物館活動との仲介役となる。家族連れの解説文は、親がさっと読んで理解でき、子ども達の疑問に答えられるような表示でなければならない。家族としてのニーズは何か、親としての行動は、博物館ではどのように現れるのか、博物館はそこまで考える必要がある。次に、障害者との関連だが、大英博物館での事例を紹介する。

これは視覚障害者のための展示である。中央には座席しかない、といったシンプルな展示設計、四角の展示空間である。視力が悪く、視野が狭い人々には、空間がシンプルなほど行動しやすく、分かりや

すい。身体的、知的な要請にあわせてレイアウトも展示方法も考えられている。触ってもいい展示物、色彩計画もグレーの展示物に対して、バックに青色を配色して、よく見えるようにしている。展示物の側に置かれた番号も、カタログのナンバーと対応させ、番号も大きく表示され、視覚障害者に分かりやすくしている。彫刻の全体像を小さな写真で示し、大きな実物の部分部分を実際に見て、全体との関連の中で彫刻を理解するという風に配慮されているなど、博物館での「ターゲットオーディエンス」は実際に効果をあげる。こうした試みは、障害者との打合わせを重ねながら実施され、展示会は大英博物館では既に3度行われており、こうした経験は次の試みにつながっている。

次に地域の博物館について紹介する。イギリスには、富裕な人や貧しい人、民族的にも中国系、ウクライナ系、インド系、ポーランド系、パキスタン系と様々な人々が生活している。これらの人々には固有のバックグラウンドがあり、コミュニティがある。関心も違う。「ハウジングエステイト」というプログラムでは、貧しい人々のために供給された公共住宅を舞台に博物館が出前展示をした。トロントのネールギャラリーの例では、インド系の職員が来館者のために説明をしている。北イングランドの博物館では、インドの舞踊家を呼び実演してもらったり、有名なインド系の彫刻家に作品を制作してもらったりして、さまざまなコミュニティとの共生が図られている。こういったことで、博物館は実に多くの「オーディエンスターゲット」が存在する。次に、これらの人々の学習スタイルについて考えてみよう。

イギリスでは教育、つまりエデュケーションよりも学習、ラーニングが注目されている。

来館者つまりビジターがどのように学び、答えて、対応し、行動するか。エデュケーションは一方的に提供するもの、これからは来館者サイドのラーニングに軸足を置く時代になってきている。種々の調査でも、人々の学習の仕方が多種多様であることが報告されている。例えば、イマジネイティブラーナー (IMAGINATIVE LEARNERS)、彼等は、想像力を発揮して学習する人であり、アナリティカルラーナー (ANALYTICAL LEARNERS) は、分析が得意な人。コモンセンスプロブレムソルバー (COMMON SENSE PROBLEM-SOLVERS) は常識で問題を解こうとする人、トライアルアンドエラーラーナー (TRIAL AND ERROR LEARNERS) と言われる人々は、試行錯誤を通して学習していこうとするタイプの人々として、それぞれ位置付けられている。次に子どもを対象とした創造的な学習について考えてみよう。

これは、子どもの歴史的体験の例で、昔の衣服を身にまとい、当時の生活道具を使って、16世紀のバンケットで飲食するというもので、歴史的なイマジ

ネーションをかき立て、過去の人々への感情移入ができ、過去に思いを馳せるといった強い学習効果をもたらされる事例として注目される。大人向けには、イマジネーションというよりも感覚から学習するという方法が考えられている。手でさわって操作してみることや臭いを嗅いで見る、重さを感じてみる、温度を感じてみるなどが挙げられよう。これはカナダのトロントのテキスタイル博物館の例だが、様々なテキスタイルの展示室以外に別の部屋で糸やテキスタイルを触ってみたり、専門家の指導のもとで実際に織ってみたりすることなどができるようになっている。専門的な解説シートも得ることが出来るようになっている。展示室では、専門的で長い説明は相応しくないが、こうした特別の部屋では効果的に受け入れられる。また、「着物」の部屋もあり、ここでは触ってみたり、着てみたりすることが出来るようになっている。また、数学的な問題、つまり四角い切れから衣服を作るといった課題の解決にも貢献する。これらについてはハワードガーナーというアメリカの心理教育学者が「論理的数学的知能」として、その効果を説いている。では、次にこれらの知能 (MULTIPLE INTELLIGENCES) について説明しよう。

まず、言葉について自由に書き話することが出来る言語的能力 (LINGUISTIC)、次いで論理的数学的知能 (LOGICAL-MATHEMATICAL)、さらには空間的な知能 (SPATIAL)、例えば医師であれば体内という空間を理解し、その中をナビゲーションできる能力を持っているし、海における船乗りの知能などは、これに当たる。さらに音楽的な才能 (MUSICAL) である、作詞、作曲などの知能、運動科学的な面での知能、ダンスが出来たりする知能を言う。そして、職人工芸家といった体の操作で出来る知能 (BODILY-KINESTHETIC)、また個人内における知能 (INTRA-PERSONAL)、対人に関する知能、政治家や教師に必要とされる知能 (INTERPERSONAL)、自然的な、環境を理解する知能 (NATURALISTIC) など、ハワードガーナーは、こうした知能として8項目挙げている。

では、これらの知能を博物館の事例を通して紹介する。

空間的な知能 (SPATIAL INTELLIGENCE) について、イングランドの北にあるギャラリーの彫刻展示を例に説明する。実際の彫刻には触れることが出来ないが、素材となっている材料には触ることが出来るようになっており、また複製した彫刻にも触ることが出来るようになってきている。空間的な知能や触ることで運動機能、感覚も同時に駆使することが出来る。音楽的な知能 (MUSICAL INTELLIGENCE) では、楽器を使い音楽を理解することが出来る。楽器博物館では楽器を実際に手にとって体験できるようになっている。運動感覚的な知能、体で体験し学習する試みは、16世紀の社会について学ぶ人々を対

象としたもので、当時の城で当時のダンスを体験している。体験することで創造的な学習者の満足を満たすことができる (BODILY-KINESTHETIC INTELLIGENCE)。個人内における個人的な知能を理解するという事に関してでは、12歳の子どもが描いた肖像画を例に説明できよう。これらはナショナルポートレートギャラリーで実践されているもので、描く対象に感情移入が出来るという効果がある (INTRA-PERSONAL)。

イマジネーションを掻き立てるためには、博物館のコレクションを資源としてさまざまな試みも行われている。ロンドンの自然史博物館では、リスとハリネズミの剥製を使って「アフリカ式ジレンマ物語」(AFRICA DIREMMA TALES) という寓話を題材に、助け合い、共存するという事についての議論の機会を作り出している。つまり、木の上に巣を作っているリスの家に、雨の日にハリネズミが訪れ、一緒に寝ようとするが、ハリネズミの針がリスをつき、リスは眠れない。こうした場合には、どうすればいいのか、といった倫理的な課題の提供として、博物館の剥製資料が役立っているのである。自然史のコレクションを使って、創作活動 (絵画創作) をしている例も興味深い。ニュージーランドの浜辺を再現したギャラリーの例では、ヒトデなどが実際に飼育され展示されており、ヒトデに触ることが出来る展示や、水槽展示でヒトデの生態が分かる展示、標本や解説パネルなど専門家を対象とした学術的展示など、ここではヒトデひとつとっても、視点を変えた展示をしている。

来館者の学習効果を高めるには、どのような発信を博物館が行われなければならないか、ということが重要になるが、そこには評価 (EVALUATION) という問題が生じてくる。

一つの評価の例を示そう。数人の子ども達を19世紀の玩具 (銃の玩具) で遊ばせた後、教室でその玩具の絵を描かせ、博物館での体験を語らせた。過去と現在のリンクが図られ、博物館体験の評価が可能となる。

来館者の反応についてのオンタリオの博物館の例を説明しよう。椅子とテーブル、テーブルの上にはレスポンスカードと呼ばれるカードが置かれている。壁には3つの絵が掛けられており、その絵の感想を自由に記入することが出来るようになっている。その中の一つに「グレースベイ」という土地の絵が描かれていたが、その絵の感想を書いた少女の記述内容が、博物館の在り方について、重要な示唆を与えている。彼女は、まだ行ったことのない祖母の故郷についての思いを書き綴ったのであるが、祖母は92歳で耳が不自由で十分に話し合ったことはない。しかし、この絵を見る事によって祖母の生い立ちがわかった、というものである。このギャラリーは「アートヒストリー」(美術史) がテーマの施設だが、彼女にとっては自分との関わりに気づき感動

を覚えたというもので、美術史とは直接関係のない体験となっている。また、人が舟に乗っている絵を見た子どもは、これは自分だ、とレスポンスカードに絵を描き、そこに自己を発見できた喜びを書いている。その一方で、なぜこのギャラリーは異文化の紹介がないのか、ヨーロッパ文化のものが主流で偏っている、私は自分達の文化が語られていないここには、子ども達を連れてこない、という黄色人種の来館者の記述もあった。このように人々の反応も、多種多様である。私は、「インタープレティブコミュニティ」(INTERPRETIVE COMMUNITIES) に答えがあると思う。つまり、様々な解釈の方法があるが、それを共有化する一つのコミュニティ単位で考える。それらのコミュニティが異なると、コレクションや展示品についても自分達の文化、バックグラウンド、事前の知識、関心に基づいて異なった反応を示す。一般大衆というが、そこにはそれぞれ別個の解釈を持った様々なグループがいる。その人々はどのような人々であり、どのような考え方をし、何をしている人々なのだろうか。これは、インド系の女性たちで大英博物館にきた人達だが、金の展示品を見ている。その金を見て、彼女達は何を考えたか。私とは違った考えをもったと思われる。

カナダの西部地方のカルガリーの博物館で、西アフリカの発展を祝う展示を計画したが、西アフリカについて、市民に調査を行った。テレビでのアフリカの紹介は、戦争、内乱、後発国、飢餓に悩んでいる人々が多いなど、ステレオタイプの情報が多い。しかも、こうした情報をもとにアフリカの人々と付き合っている人も多く、誤解を生んでいるといった返答があった。したがって、ここの展示では敢えて、アフリカを称賛する前向きな展示を心がけた。オリエンテーションの場としてギャラリーの三分の一の空間を確保し、それにあてたり、地図や展示物、あらゆる情報や資料を展示して、難解なテーマの紹介に務めた。民族に関わる展示物は、極めて象徴的である場合が多い。それらを紹介するには多くの語彙が提供され、表題、プレゼンテーション、ディスプレイデザイン、空間のボリュームなどの検討協議が関係者との間で行われた。さて、話はどこまできたのだろうか、来館者の研究が重要である、というところまできたかと思う。新しい専門領域とっていいかもしれない。博物館のプロフェッショナルとしてビジタースタディを行うことが必要になってきている。その研究といっても、いろいろな方法がある。例えば、アンケート調査で、どのような人々が博物館にきているのか、どのような人々が博物館に来ていないのか、マーケティングの視点から来館者と非来館者を見るわけである。それから博物館に足を運ばない人々の原因を見つめる。イギリスの場合、なぜ博物館に人が来ないのかの調査をしている。それから、バリエーション (評価) の問題、プログラム、ワークショップの評価の問題などがある。パリ

ューションでは、企画段階の評価もする。何をどうするか、それが効果的かどうか、企画段階のフロントエンドの評価、形成段階でのプランの評価、例えばラベルをテストする、インタラクティブなデバイスをテストする。そして、最後には総括的な評価である。結果として来館者は期待通りのものを持ち帰ることが出来たかなど。また、来館者の代弁者がいる。ビジタースタディを実施するとさまざまなマネジメント情報が得られる。これらは館長にとってもいい判断材料になる。イギリスでは、博物館が人々に、いい学習の機会を提供しているかどうかの証を政府が求めている。ビジターの体験、そこで得られた成果、学習によって、ビジターはどのように変わって行ったか、知識や理解、スキル、価値観、あるいは感じ方の変化、モチベーションが高まったか、インスピレーションを得たか、楽しかったか、学習によっては、行動が変容するかもしれない、政府は学習による包括的な成果を見ようとしている。レスター大学の研究センターでは、包括的な学習成果を測ろうとしている。極めて広義なカテゴリーで学習の効果を見ようとしている。来館者の感想や意見をカテゴリー化して、包括的な学習の成果として位置付けることが出来れば、学習効果の証として政府にもその存在の必要性を主張することができよう。

さて、これまでコミュニケーションの方法をいろいろな視点から考えてきた。オーディエンス、ビジターらを視野に入れながら、話を進めてきた。博物館がコミュニケーションのアプローチを変えることが出来るならば、新しい社会における重要な役割を全うすることができよう。学習という場を通じて、さらに社会に貢献できるであろう。そうなれば人々のモチベーションも高まり、クリエイティビティも高まると思われる。クリエイティビティが高まることで、考え方もまた価値観も変わっていく。様々な異なった社会グループのコミュニケーションの場に博物館はなり得るかもしれない。さまざまなコミュニティが参加し、コレクションを通じて博物館という空間の中で交流が図れるかもしれない。展示を通じて、いろいろなものを取り込むことが出来るような社会を作り上げることが出来るかもしれない。社会の構成員である男女やさまざまな文化グループ、またこれらのいろいろな構成要素を包含した社会のあり方を博物館が語ることが出来るかもしれない。そうすれば、これまでの先入観を崩して、新しい21世紀の姿を模索することが出来ると思う。今日は、有り難うございました。

研究部会活動報告
ミュージアムショップ
研究部会
第1回研究会

テーマ：第1回 活動報告

日時：平成14年11月16日 午後2時～午後4時

場所：電気の史料館（横浜市鶴見区）

報告者：松永 久（株式会社三菱総合研究所 主任研究員）

参加者：6名

1. はじめに

昨年度のショップ部会では、わが国におけるミュージアムの展開においてミュージアムショップが果たすべき役割がますます重要になると言うことを報告させていただいた。今年度の第1回の活動では、その際に事例として紹介した東京電力の「電気の史料館」のミュージアムカフェを見学し、これからのミュージアムショップのあり方についてディスカッションを行った。

なお、今回は「電気の史料館」に初めて訪れる方も多いものと考え、まず前半の1時間を館内の見学に当て、その後、ミュージアムカフェで実際にカフェで販売されている商品を食べながら、カフェの店長、さらには東京電力のスタッフと懇談を行った。

2. ミュージアムカフェのあらまし

ミュージアムカフェ（以下、「カフェ」とする）のあらましについては、既に前回の部会で報告しているので、その詳細については、省略する。カフェは平成13年12月に「電気の史料館」がオープンしたと同時にスタートし、ほぼ1年が経過しようとしている。

カフェのメニューは、毎日店内で焼成するドイツ製のパンとサンドイッチ、そして短時間でゆであげることができる3種類のパスタ、さらにバリエーション豊富なドリンク類（ウリは今話題となっている黒部ダムの水筒を溶かしてできたミネラルウォーター）、デザートから構成されている。また、ランチ時の対応としてパン、パスタのいずれもテイクアウトが可能なランチボックス（アメリカ製）を用意している。

また、座席は、ガラス越しに人工池を眺めることができる止まり木タイプの席（数席）、VIPや会議用対応の席（10席程度）、そして一般的なテーブル席（15席ほど）から構成されている。

3. カフェの利用者とその特徴

カフェの利用者数に大きく影響を及ぼすのは言うまでもなく「電気の史料館」の入場者数であるが、これについては、当初の見通しとほぼ同じ程度（年間約3.5万人）で推移しているとのことである。ただし、その多くは団体客であり、館内の見学時間が限られていることから、なかなかカフェに立ち寄ってゆっくりしていただけるような環境にはないというのが実状である。それでも、来館者の約30%近くが、

何らかの形でカフェを利用してきているという実績を残しているということであるから、少なくとも国内のミュージアムにおける飲食施設と比べると十分高い利用率であると言えるだろう。

しかし、ここで留意しなければならないことは、現在の利用者数でカフェの運営が安泰か、ということ決してそうとは言えないということである。団体客対応を考えると、ある程度見込みでパンやデザートを仕込む必要があるためロス率（販売できずに廃棄される率）が高くなってしまふ。しかも、「電気の史料館」の周りには住宅が少なく、「電気の史料館」の来訪者以外に外部からカフェを利用してくれる人を期待することはほとんどできない。これが、交通条件の良いロードサイド（幹線道路沿い）や周辺に住宅が密集しているような場所に立地しているのであれば、ミュージアム来訪者以外の利用も見込むことができ、ロス率も低くすることができるが、今の環境ではそうした来客までを期待することはできない。実際、カフェのオープン後に外から直接カフェに入ることができる通路を設けたが、訪れたのは数えるほどだそうである。

こうした中で、来館者以外に今のカフェの利用を支えているのは、同じ敷地の中にある東京電力の研究施設（約400名が在籍）の職員、「電気の史料館」の職員・パート勤務の方々である。研究所には平日は毎日打ち合わせ等で訪れる人がおり、こうした人と社員との会議の際にコーヒーの需要があるということである。

4. 意見交換

今回の部会では、ミュージアムカフェの小谷店長、そして「電気の史料館」の渡部主任にもご参加いただき、カフェのアウトライン、現状等について説明を受けた。その後、参加者から様々な意見が出された。以下に、その代表的なものを載せることにする。

- ・ミュージアムにおけるカフェの重要性を実感した。
- ・食事はとてもおいしい。ただ、バリエーションとして（難しいかも知れないが）米飯類をメニューに組み込むことができないか。この施設内容から考えると、高齢者の来場も多いことから、米飯系のメニューが何かあると入りやすいのではないか。また、研究棟の職員にとっても、米飯のバリエーションがあった方が利用しやすい感じがする。

- ・電気の史料館は基本的に堅い展示物が多いので、カフェは柔らかめに過ごしてもらって展開の方が良い。
- ・現状では、入場者数の30%程度が利用してくれているというのは、カフェとしては健闘していると言えるが、入館者数のパイが少ないので収支面ではかなり大変ではないか。立地から考えて、外に住む人が訪れる可能性は少ないから、何らかの工夫が必要ではないか。例えば、入場料収入自体はもともと大きな金額を見込むことができないのだから、入館料にカフェの利用券を含むというのも一つの手ではないか。
- ・来訪者自体をもっと促す手だてを考えてみてはどうか。

5. おわりに

最後になったが、今回の部会の開催にあたっては、「電気の史料館」には多大なご協力を頂いた。また、カフェの小谷店長には仕事中のところ、長時間にわたりディスカッションに参加していただいた。紙面を借りてここに御礼をする次第である。

次回の部会は、3月8日(土)～9(日)の1泊2日で『“早春の箱根”にて美術館のCS戦略を学ぶ』と題して、JMMA関東支部、事業戦略研究部会との共催で行なわれる。当ミュージアムショップ部会は、部会長の川津尚一郎氏が「ミュージアムショップの商品開発」というテーマで、3月9日(日)11:30～12:30に講話を予定している。

電気 の 史料 館

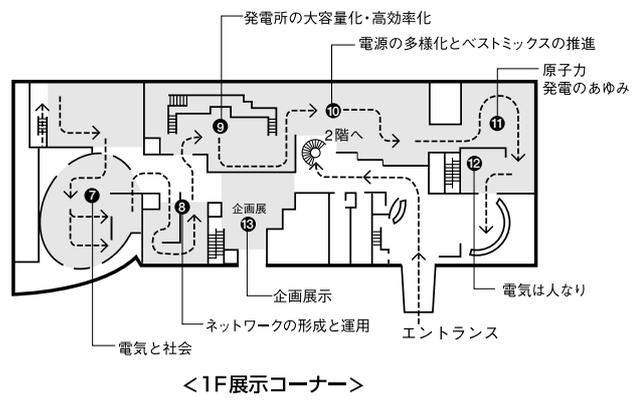
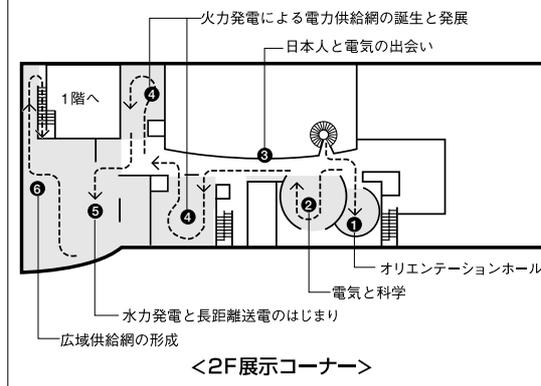
- ◎開館時間 10:00～18:00
(入館は17:30まで)
- ◎休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
および年末年始
- ◎入館料 大人500円 高校・中学生300円
小学生200円(団体割引あり)
- ◎所在地 〒230-8510 神奈川県横浜市鶴見区
江ヶ崎4-1
- ◎電話 045-613-2400
- ◎URL
<http://www.tepco.co.jp/rd/shiryokan/index-j.html>



館内見学順路

エントランスから入館後、中央の階段にて2階へお上がりください。

□ は展示スペース



研究部会活動報告
制度問題
研究部会
第1回研究会

テーマ：「ミュージアムに求められる人材とは」

日時：2002年11月24日（日）13：30～16：30

場所：お茶の水女子大学文教育学部1号館第1会議室

講師：島津晴久氏（前八千代市立郷土博物館館長）

報告者：井上 敏（桃山学院大学）

参加者：19名

はじめに

博物館に対する社会の要請が益々大きくなっているなかで、博物館自身の内部改革が迫られている。そのため博物館の役割が多様化し、従来の学芸員の職務の見直しや人事のシステムとともに、さまざまな専門知識や技能をもった職員が必要とされている。そこで当制度問題部会では今日の博物館に求められる人材とは何か、それらをどのように養成していけばいいかを考えるシリーズを企画した。まず第1回目として、これまで数々の博物館に勤務され、学芸員に対するさまざまなご経験、ご見識が豊かな島津晴久氏にご報告していただいた。

1. これまでの仕事を振り返って

横浜の財団法人の博物館を振り出しにして千葉県に移り、県立上総博物館、県立安房博物館、館山市立博物館準備室、国立歴史民俗博物館、県立大利根博物館、県立房総のむら、八千代市立郷土博物館と多くの博物館での勤務を経験した。横浜の博物館の在勤中においては神奈川県博物館協会に属する博物館の先輩方から多くの薫陶を受け、そこには仲間として分け隔てなく学芸員を育てる気風があった。その後、異動した千葉県の博物館では博物館の職人の必要性を感じ、また博物館専門の人材養成を考えるとそれらの学会をつくる必要性も痛感し、全日本博物館学会、日本ミュージアムマネジメント学会の設立に関わった。

自分が博物館に勤めだした昭和30年代ごろ、「博物館行き」という忌まわしい言葉が巷に横行していた。これが当時の一般社会の博物館に対する評価であったのかもしれない。現在教鞭をとっている大学の学芸員養成講座でこの言葉を学生にきいてみると、その意味とは隔世の感がある「良い意味」で受け取られているので、博物館に対する評価も変わったものであると喜んでいる。これは全国の多くの博物館が、それぞれの地域で趣向をこらした活動の結果である。10年ほど前、あるテレビ番組で高校生が博物館の学芸員を希望する職種としてあげていた。このことも博物館が社会的に認知された結果であろう。また、今日の博物館界の隆盛を迎えた要因の一つに格段とすすんだ展示技術をいち早く取り入れたこともあげられる。それはディスプレイ業者の博物館業界への進出によって博物館に斬新な展示技術が導入されたからであろう。

2. 千葉県の博物館での経験を通して

千葉県は昭和43年に「千葉県立博物館設置構想(案)」を作成した。この構想は行政的な配慮のもと県内の各地域ごとに県立博物館を設置するという考え方である。県民がそれぞれの地域で博物館を利用し、また文化財の保存も図るということである。この構想の実現に関わり、現在では10館が設置されている。その後、市町村や私立の博物館もできて県立だけでなく、県内の博物館全体が充実してきている。

長い間、博物館に勤務していると、いろいろなことに遭遇した。その一例として、昭和58年に県立安房博物館の建設時に、ちょうど田中角栄首相の日本列島改造論が華々しく打ち上げられて博物館の建築資材が高騰し、そのため建設計画に困難をきたし、展示計画にも影響がでた。そのため、しっかりした博物館の建設計画、展示計画を立てる必要性を痛感した。もちろん学芸員は業者と協力して、計画を進めて行くのは必要であるが、学芸員はきちんとした識見をもつことが必要である。

また博物館事業で講座を行う時にはその講座の参加者の層を分析する必要性を在職中つねづね職員に言ってきた。博物館の入館者数の分析を進めていくなかで、入館者が博物館評価の一つのパロメーターという部分がある。現在、国立の博物館は独立行政法人化されている。この制度では入館者数が評価のパロメーターの一つになっているが、このことは一概に否定できない部分もある。

地方においては、ややもすると博物館の存在が政争の具に使われることがある。これは博物館の施設とそこで働く職員にとっては大変迷惑なことである。博物館はその地域住民に支持される施設であれば、その地域の首長がどのような無理を言おうと大丈夫であるから、そういう博物館を目指すように職員に言ってきた。

また学芸員は幅広い知識をもち、チームの一員として活躍できる人材が望ましいと思う。ただ、それだけではなく博物館のなかで、学芸員としての専門性の深化をはかる必要もある。昭和40年ごろであったと思うが博物館の学芸員について話し合う会合に出席したことがあったが、そこでの大多数の意見は修士以上の学位を有する者、日本学術会議の選挙権をもつ者、といった高い基準の設定の必要性を議論し、これらの資格を有する人たちに学芸員資格を付与すべきであるということであった。私はそれ以前の問題として博物館の底辺を支える学芸員の必要性

を述べたことがある。ことに自然科学系の人が学芸員資格をとりにくいという問題がある。当時、自然科学系の大学における学芸員科目の設置がなされていないことが多く、そのことが主な原因になっていたのである。

今、これからの学芸員の養成の問題を考えるにあたっては高度な知識を身につけ、共通の立場で議論ができ、さまざまな経験の積み重ねが出来る人材の輩出が求められているように思う。

3. 質疑応答

研究会の後半は参加者全員による質疑応答によって議論を進めていった。

【質問】

学芸員がいない博物館やできてからさまざまな人員が入ってくるような博物館があるが、これからどうい博物館にしていくのかが見えない。博物館の機能が社会的に変わってきており、また利用者の立場から博物館をつくるのが大事だが、誰が博物館の運営に責任をもってやっていくのか。

【応答】

しっかりとした計画と人材（特に学芸員）が必要であろう。計画をしっかりとできていないのに展示業者におんぶに抱っこでは困る。博物館は人間が動かししている。学芸員は博物館の計画当初から関わっていくべきである。

【質問】

学芸員の養成をどのように考えるか。

【応答】

これからは人材をプールできるところをつくり、適材適所の人材配置が必要であると思う。リストラ等で人員削減が起こるだろうが、そういったなかでも生き残れる人でないと駄目である。博物館のなかでは後継者を育てることの難しさがある。キュレーターは「ものと人との媒介者」である。生活の中にあるものが収蔵品であり、深みのある人が必要である。また、話す相手の顔色を見ながら話題を変えられるぐらいの能力のある人でなければならない。3年ぐらいでマスターできなければ、能力がない人と判断してもよいのではないか。最近の大学生の基礎学力が落ちているので、その中で人材養成をすることはますます難しくなっている。

【質問】

学芸員と事務方という博物館の職員の問題はないか。

【応答】

最近の博物館では定員数の問題で事務方を少人数

にして学芸員が事務を行うところが増えている。行政内の効率化によって事務方を削減したり、他所へ異動させたりして学芸員が事務をやらなければならないケースもある。博物館における事務方は新しいことをしながらない傾向もあり、その定員を学芸職員に振り替える場合もある。そこで学芸員が事務の一部を分担することになるが、事務ができない学芸員はいないという考え方もある。事務方と学芸員とのチームワークも必要であろう。

【質問】

行政内で学芸員の養成ができないのか。

【応答】

学芸員の養成は行政内の異動によって養成するという方法もある。博物館同士での人事交流の必要性もあるであろう。その場合、博物館の資料等について、学芸員の引継ぎはきちんとすべきである。学芸員が働ければ働くほど良い資料を集めることができ、博物館は充実していく。そういった良い意味での博物館の循環が必要であろう。教員の異動と同様に学芸員の異動の可能性をこれから視野に入れるべきだろう。ただ、そういった異動をしたがらない学芸員もいる。

【質問】

これからの学芸員の人材募集のあり方は？

【応答】

博物館の学芸員・事務員について職員公募をすべきではないか。また人材をストックしておける機関の必要もある。

【質問】

博物館における館長のあり方にも問題があるのではないか。

【応答】

博物館の館長は非常勤の場合が多く、2年ごとに館長が変わったりするような例もある。このような館長の多くは自分の哲学に基づいたリーダーシップを発揮したりしないことが多い。人事権が館長にないことが多く、そのことも問題である。

今回の研究会では博物館における館長や学芸員、事務員のそれぞれの在り様について問題点が幾つか浮かび上がってきたが、今回は現在の博物館学芸員課程における養成の問題とエデュケーターの養成プログラムに絞って考えていくこととなった。

生涯学習の新しいステージを拓く 〈第3巻〉

『クリエイティブな学習空間をつくる』

白石克己・廣瀬隆人 編

発行：ぎょうせい

本体価格：2667円＋税

ISBN：4-324-06426-1

生涯学習の新しいステージを拓く

3

クリエイティブな 学習空間をつくる

白石克己・廣瀬隆人・稲葉隆・佐藤晴雄／編



ぎょうせい

生涯学習とは、人々が生活の向上を目指し、生きがいや心の豊かさを求めて、自発的意志に基づいて行う学習活動である。国際化、情報化などによる社会の変化や、人々の学習需要の多様化に対応した社会教育施設・生涯学習施設等は各地域に設置されている。

本書では、これらの関連施設を「学習空間」と捉えている。序章では、これまで社会教育施設に閉じ込められていた「学習」が、社会の様々な働きの中に拡がっていく現象を「拡散」と捉える視点を提示している。

『クリエイティブな学習空間をつくる』は以下のような構成になっている。序章「クリエイティブな学習空間をつくる」(廣瀬隆人)、第1章「社会教育施設の革新と学習空間の拡大」(佐藤晴雄)、第2章「生涯学習センターの最前線」(田中雅文)、第3章「創造する文化空間」(文化施設の方向性) (垣内恵美子)、第4章「健康創造空間としての体育・スポーツ施設の方向性」(西野仁)、第5章「学習空間の拡散」(事例編) (伊藤真知子、稲葉隆、伊原浩昭、陣内雄次、三代裕子、石川昇、小山紳一郎)である。各章に「空間」の文字が含まれていることから、単なる施設というハード面での利用を超えて、人々の生活に「学習」が根づいてきていることが伺える。

本書では、社会教育施設・生涯学習施設の先駆的事例を多数取り上げ、その中に「参画」

「協働」「共生」「自立」のキーワードを見出している。そして、「まちづくりサポートセンター」「環境センター」などのように、「現代的課題」に関する関連施設が増えてきている点にも着目している。地域における人々の社会参加、社会参画をサポートする新しい施設の紹介を通じて、このような現象の実態を明らかにしようとしている。

また、社会教育施設と行政、市民との関わり方の多様性にも着眼して論じられている。市民が学習者、ボランティアとして主体的に活動をマネージメントできる機会が提供されつつあることが伺える。

なお、本書は全6巻からなるシリーズ本である。生涯学習の現場や企業、学校などで生涯学習を推進している方々には是非読んでいただきたい。今日のわが国における生涯学習の実態の解説として、多くの示唆を提供してくれるものである。

(文責 宇都宮大学院生 小松 弘子)

i n f o r m a t i o n

◆会報に掲載する投稿原稿を募集いたします◆

JMMA会報では、投稿原稿を募集しています。編集方針は以下のとおりですので、原稿を投稿する方は事務局までお知らせ下さい。

【JMMA会報投稿原稿の考え方】

1. 会員の未発表原稿を取り上げるものとしますが、事務局から会員及び会員以外の方に原稿を依頼することもあります。
2. 投稿にあたっては、会報のどのコーナーに投稿するかを明記し、事務局まで申請してください。
3. 原稿は、署名原稿として掲載します。
4. 投稿された原稿については、編集委員会によって審査が行なわれ採否を決定します。
5. 投稿原稿は採否にかかわらず、返却いたしません。

◆会報28号（次号）情報提供のお願い◆

会員の方々が携わった、または見学した展示施設情報、リニューアル情報、ミュージアム新設情報、展示メディア開発等をお知らせ下さい。会員の方々の出された出版物や研究成果をお知らせください。会報等で掲載します。サポートしてほしい情報や案内等もお気軽にお寄せください。

【JMMA会報の基本構成】

1. 論考・提言・実践報告
会員の研究、考察、実践活動等の成果を発表します。
2. ミュージアムのエントロプルナ
ミュージアム運営において、果敢な取り組みを行なっているミュージアム人にスポットライトをあて紹介します。
3. 時の話題
ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連の新制度、その他さまざまな取り組み成果など、ミュージアム・マネジメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。
4. 研究部会報告
各研究部会の活動を掲載します。
5. 支部会だより
各支部会の活動を掲載します。
6. 新刊紹介
ミュージアムに関連する本、ミュージアム・マネジメントに参考になる本等を、書評を添えて紹介します。
7. インフォメーション
事務局からのお知らせを掲載します。

◆会費納入のお願い◆

会費未納の方は下記口座までお早めに納入くださいますようお願い致します。
請求書・領収証等が必要な方は事務局までご連絡ください。

郵便局の場合 口座番号 00160-9-123703
「日本ミュージアム・マネージメント学会」
銀行の場合 みずほ銀行 鶯谷支店 普通預金 No.1740890
「日本ミュージアム・マネージメント学会」

◆事務局から◆

事務局の窓口業務は、月曜日から金曜日までの午前10時から午後5時までとさせていただきます。
ご了承ください。

なお、ファックスについては常時受信可能ですので、こちらもご利用ください。

新規入会者のご紹介

【個人会員】

尾崎 晃 様 千葉県立房総のむら
小林 弘治 様 千葉県八千代市立高津中学校
城塚 朋和 様 吉川英治記念館
千葉 雄司 様 慶應義塾幼稚舎
長谷川 総一郎 様 富山大学
三石 祥子 様 日本科学未来館

井戸 幸一 様 乃村工藝社

【学生会員】

大塚 留美 様 青森大学大学院
高原 健一郎 様 筑波大学大学院
田島 夕美子 様 國學院大學大学院